

平成27年度 教育推進・学生支援機構  
学修支援部門（初年次教育）

F D 研究会報告

どうする！？ 初年次セミナー



教育推進・学生支援機構 学修支援部門（初年次教育）  
FD研究会 報告書

目 次

- 実施要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
  
- 機構長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3  
機構長 江馬 諭
  
- 講演1 初年次セミナーのアンケート調査から見えてきたこと・・・・・・・・ 4  
海野 年弘（学修支援部門副部門長／初年次担当）  
資料
  
- グループ討議・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18  
司会：廣内 大輔（教育推進・学生支援機構 准教授）
  
- 講演2 初年次セミナー改革の試みー応用生物科学部の取り組みー・・・・・・・・ 22  
杉山 誠（応用生物科学部・副学長）  
資料
  
- 部門長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39  
学修支援部門長 加藤 直樹
  
- 参加者データ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
  
- 参加者アンケート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

**平成27年度 教育推進・学生支援機構 学修支援部門（初年次教育）  
FD研究会 実施要領**

【テーマ】「どうする！？ 初年次セミナー」

【趣 旨】

学修支援部門・初年次教育担当会議では、全学共通教育科目として開講されている「初年次セミナー」のあり方について、平成26年度より検討を進めております。同年度には、この科目を担当している教員・コーディネーターの方を対象としたアンケート調査を実施し、より良いセミナーにするためにはどのような内容が適切か、現行のセミナーの問題点は何か、について実態を把握いたしました。また、平成27年度には受講学生を対象とした調査を実施し、学生の視点から見たこの科目の満足度および今後改善すべき点について分析いたしました。

今回のFDでは、これらのアンケート調査結果および初年次教育担当会議にて議論した内容を報告するとともに、学部での取り組み事例として応用生物科学部の初年次セミナーを取り上げ、これまでの改善の取り組みや工夫している点について紹介していただきます。これらの報告を基に、今後のセミナーのあり方について議論を深めたいと思います。

【日 時】平成28年2月3日（水）15：00～17：00

【場 所】全学共通教育講義棟アクティブラーニング教室

【対 象】岐阜大学 教職員・学生

【主 催】教育推進・学生支援機構 学修支援部門（初年次教育）

【プログラム】

15:00～15:10	開催の挨拶 江馬 諭（教学・附属学校担当理事／機構長）
15:10～15:20	FDの趣旨説明 廣内大輔（教育推進・学生支援機構／学修支援部門）
15:20～15:50	初年次セミナーのアンケート調査から見てきたこと 海野年弘（学修支援部門副部門長／初年次教育担当）
15:50～16:20	これからのセミナーをどうするかグループ討論 （参加者を交えて）
16:20～16:50	初年次セミナー改革の試みー応用生物科学部の取り組みー 杉山 誠（応用生物科学部・副学部長）
16:50～17:00	閉会の挨拶 加藤直樹（副機構長／学修支援部門長）
	* 司会進行：廣内大輔（教育推進・学生支援機構／学修支援部門）

# 学修支援部門(初年次教育担当)FD

## 「どうする！？ 初年次セミナー」

**日時:**平成28年2月3日(水) 15:00~17:00

**場所:**全学共通教育棟 アクティブラーニング教室

**趣旨:**学修支援部門・初年次教育担当会議では、全学共通教育科目として開講されている「初年次セミナー」のあり方について、平成26年度より検討を進めております。平成26年度には、この科目を担当している教員・コーディネーターの方を対象としたアンケート調査を実施し、より良いセミナーにするためにはどのような内容が適切か、現行のセミナーの問題点は何か、について実態を把握いたしました。また、平成27年度には受講学生を対象とした調査を実施し、学生の視点から見たこの科目の満足度及び今後改善すべき点について分析いたしました。

今回のFDでは、これらのアンケート調査結果及び初年次教育担当会議にて議論した内容を報告するとともに、学部での取り組み事例として応用生物科学部の初年次セミナーを取り上げ、これまでの改善の取り組みや工夫している点について紹介していただきます。これらの報告を基に、今後のセミナーのあり方について議論を深めたいと思います。

### プログラム:

**15:00 開催挨拶**

江馬 論(教学・附属学校担当理事/機構長)

**15:10 FDの趣旨説明**

廣内大輔(教育推進・学生支援機構/学修支援部門)

**15:20 初年次セミナーのアンケート調査から見てきたこと**

海野年弘(学修支援部門副部門長/初年次教育担当)

**15:50 これからのセミナーをどうするかグループ討論**

**16:20 初年次セミナー改革の試み－応用生物科学部の取り組み－**

杉山 誠(応用生物科学部・副学部長)

**16:50 閉会挨拶**

加藤直樹(副機構長/学修支援部門長)

**司会進行**

廣内大輔(教育推進・学生支援機構/学修支援部門)

主催:教育推進・学生支援機構 学修支援部門(初年次教育担当)

## 機構長挨拶

江馬 諭 教育推進・学生支援機構長



先生方、こんにちは。今は試験期間中でしょうか、お忙しい中お集まりいただき、本当に有り難うございます。たくさんの方にお集まりいただきました。今ご説明がありましたように、本日は教育推進・学生支援機構学修支援部門の初年次セミナーFDを開催していただくということで、担当の先生方、まずもってお礼申し上げます。有り難うございます。

以前は教養セミナーと言っていたのでしょうか、それが何年か前にこの初年次セミナーに代わり、その中身も随分検討されてきて、今日は色々なことをお聞かせいただけるのではないかと考えております。ちょうど45年前、私が大学に入学したころを振り返ってみますと、当時教養部というのがありまして、クラブの先輩や友達に必要な授業や受講登録の方法を教えてもらったことを思い出しました。また、現在入学した学生も、同学科の2年生とか3年生の人に聞く、クラブ活動の先輩に聞くなど、いろんな方法で情報を収集しているようでございます。

けれども、やはりこの初年次セミナーというのは非常に大切な科目ではないかなと思っております。特に、ゆとりの世代の学生さんが入学ということもあって、この科目の重要性は益々大切になってくると思っております。本日は、限られた時間でございますけれども、発表をお聞きいただき色々なご議論をしていただければと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

## 講演 1

# 初年次セミナーのアンケート調査から 見えてきたこと



海野 年弘

(学修支援部門副部門長／初年次教育担当)

### 【スライド 1】

それでは、「初年次セミナーのアンケート調査から見えてきたこと」というタイトルで、私のほうからお話をさせていただきたいと思います。

私は、学修支援部門、初年次教育担当会議で委員長を仰せつかっております応用生物化学部の海野と申します。どうぞよろしくお願いたします。

今日は、この初年次セミナーに関して、昨年度と今年度にとりましたアンケート調査から、初年次教育担当会議で考えたことを皆さんに披露させていただいて、意見等を頂戴したいと思っております。

### 【スライド 2】

私の伺った話では大体約30年ぐらい前ですか、教養部があったころに「教養セミナー」というのが開講されていまして、これは教養部で全学の学生を対象に、専門とは別に教養を重視した内容のセミナーが開講されていたということでございます。

目的としては、やはり大学生活への定着を図ったりするようなものだというのを伺っております。ある意味では、今行っていますこの初年次セミナーも似たような内容なのかなと理解をしております。

こういった形で最初はセミナーが開講され、教養部がなくなった後、各学部になんか形でセミナーが実施されてきました。23年度以前は各学部でセミナーが開講されていまして。例えば工学部はフレッシュャーズセミナーという名称がついていましたし、それ以外であれば、教養セミナー、新入生セミナーといった名称で1年生を対象にした授業があったわけです。平成24年度に、当時の教養教育推進センターがこのセミナーを全学共通教育科目として開講するということになり、名称も初年次セミナーとして開講されて現在に至っているということになります。

### 【スライド 3】

当時のシラバスの中に案内文が出ておりますが、「高校生から大学生に変わるために必要な知識や心構えを学ぶ」ということが初年次セミナーのシラバスに記載されております。ただ、内容に関しては、これまでの歴史的な背景から各学部で行っていたということもあ

って、内容は各学部・学科によりさまざまなものがあるということが記載されております。

#### 【スライド4】

実際に、現在こういった形でこのセミナーが各学部で開講されているかということですが、教育学部に関しては各講座でセミナーが開講されています。地域科学部では担当の先生の名前がついたセミナー、医学部は、医学科と看護学科、それぞれ1つずつのセミナーが開講されています。それから工学部に関しては、各学科でセミナーが開講されている状況でございます。最後に応用生物科学部については、以前は地域科学部と同じように教員の名前がついたセミナーが開講されていましたが、今年度からやり方が変わりました。それについては、この後杉山先生に詳しくお話をいただけるかと思っております。

#### 【スライド5】

各学部で開講されていますセミナーの特徴を、シラバスから非常に大ざっぱに見てみますと、教育学部は講座ごとの授業内容です。専門教育への橋渡しの内容が行われているようです。地域科学部は担当教員ごとにグループワーク、課題解決型の授業、いわゆるゼミ形式といった内容が主ではないかとシラバスから伺えます。それから医学部は共通教育メニューの実施ということでグループワーク、教員個別セミナーの内容がシラバスに記載されております。また、工学部は学科ごとの授業内容ということで、専門教育への橋渡しの内容や課題解決型、あるいはそのプレゼンテーション、講演会、こういったものが含まれておりました。最後に応用生物科学部ですが、今年度から共通教育メニューの実施ということで、日本語教育と講演会を主に据えた内容になっております。

#### 【スライド6】

平成24年度に全学共通教育科目になり、当時の教養教育推進センターでは、初年次セミナーの目的として、高大転換教育科目といった位置づけで全学共通教育科目にしたと伺っております。そのため平成25年度には、初年次セミナーに係るFD研究会とか、あるいは初年次セミナーの共通性を探るといようなタイトルでワークショップも開催されておりました。さらに教養教育推進センターでは、約10回分の学部にとらわれない共通性の高い授業を初年次セミナーでやってはどうかといった計画案が提案されております。

#### 【スライド7】

これがその計画案ですが、このうち健康管理、図書館の使い方は現在、多くの学部・学科で既に取り入れ、初年次セミナーで実施していると思っております。それ以外にも8項目の提案が平成25年度に出されております。

#### 【スライド8】

それで、平成25年度12月には新しく教育推進・学生支援機構ができて、平成26年度から我々、初年次教育担当会議も本格的に「初年次教育」ということで、初年次セミナーをどうすべきか検討を開始しました。

そこでまずは、先ほどの約10回分の授業計画案が出されておりましたが、それが実際担当されている先生から見た場合にどうなのか、現行の初年次セミナーの中に入れること

が可能なのかなどなのか、あるいはどんな問題点があるのか、その辺を平成26年度にまずは実際に担当されている先生方にアンケートを実施したところでございます。

さらに今年度は、実際に受講している受講生を対象にアンケートを実施しました。全学共通教育科目に関しては、全ての科目に授業評価等が実施されておりますが、この初年次セミナーに関しては、実質的に各学部で開講されているということもあって、全学共通教育科目で行うような授業評価等はこれまで行われておりませんでした。もちろん各学部では、そういった授業評価等が行われていたかもしれませんが、ぜひ学生に対しても意見を聞いてみようということで、今年度調査を実施したということでございます。

今日はその一部を、初年次セミナーのあり方についてということで、先生方に披露させていただいて、また御意見をいただければというふうに考えております。

#### 【スライド9】

まず、昨年行いました担当者の先生に実施したアンケート結果から紹介していきたくと思います。

#### 【スライド10】

質問項目として、ここに掲げるような5つの項目でアンケートを実施しました。

1つ目の質問として授業計画案になります。

#### 【スライド11】

この授業計画案は、先ほど教養教育推進センターで出されていた10項目の授業計画案でございます。これを現行の初年次セミナーでどの程度先生方が取り入れて実施しているのか、その各項目の重要度がどの程度なのか、ぜひ取り入れていきたいか、必要ないか、まずはこれを1つ目の質問として伺いました。

#### 【スライド10】

それ以外に、こういった授業計画案を現行のセミナーに取り入れることが可能なのかとか、その辺についても伺っております。

現在、全部で40人の先生方が初年次セミナーを開講されております。そのうちの34名から回答を得ました。今日は一部にはなりますけれども、順番に見ていきたくと思います。

#### 【スライド12】

まず、こういった項目が現行の初年次セミナーでどの程度実施されているかということですが、こうやって見てみますと、健康管理について、図書館の使い方、これは図書館ツアーになりますが、この2つは既にいろんな学部・学科で取り入れてやっていることもあって、非常に実施率が高いという結果です。

その他で高かったものが、この赤で囲った3つぐらいの項目であり、50%以上の実施率で、現在の初年次セミナーで取り入れられているということになります。

#### 【スライド13】

では、各項目がどの程度重要かということで、青が「ぜひ取り入れるべき」、赤が「取



り入れることが望ましい」、緑が「必ずしも必要ない」、紫が「全く取り入れる必要がない」ということで、傾向をまとめた結果がこのようになっております。

この中でも、赤で囲った項目が「ぜひ取り入れるべき」あるいは「取り入れることが望ましい」といった回答が寄せられた割合が50%から60%という、比較的高い重要度だということが言えるかと思えます。健康管理と図書館の使い方の他に、レポートの書き方、あるいは文献調査の仕方といった勉強の仕方に関する項目も重要性が高いということがこの結果からわかるかと思えます。ただ、文献調査の仕方に関しては、非常に重要だという回答がありますが、実際に実施しているかという観点からすると、2割ぐらいの実施率でしかありませんでした。一方、英語の学び方、岐阜について学ぼう、こういった項目は必ず初年次セミナーでやる必要性、重要度としては低いということで50%以下の結果になっております。

#### 【スライド14】

次に今出てきた幾つかの項目以外で、新たな項目を初年次セミナーに取り入れることができるのかどうか、その辺を聞いたのがこの結果になります。「できそうだ」と回答した割合が25%ぐらいで、「条件つきで可能」と回答した割合が50%近くです。「とても無理だ」という回答もありました。また、「条件つきで可能」という回答もありましたが、条件を見ると教育推進・学生支援機構から先生を派遣してくれれば可能という、実質的には無理ではないかという結果でありました。

#### 【スライド15】

各学部・学科の先生方は、これまでいろいろ創意工夫されていまして、ある程度初年次セミナーの内容は恐らく固まっているのではないかと思います。ですから、そういった状況で新たに別の項目を組み入れるということに対しては、非常に抵抗があるのかなというように感じがしております。実際に、ある程度学部・学科ごとの自由度を残してほしいという意見が多く見受けられました。あるいは、初年次セミナーの位置づけや目的が少し曖昧ではないかとか、ガイダンスでやるべき内容がどうも混在しているのではないかという意見も見られております。

#### 【スライド16】

確かにこの教養教育推進センターで出されたこの10項目を見てみますと、一応高大転換教育科目を目的としているわけですが、キャンパスガイドであるとか防災危機管理といった項目は大学生活にかかわることであって、高大転換教育になるのかなという気がしております。その点についても初年次教育担当会議では、今回のアンケート結果をもとにして議論をいたしました。

#### 【スライド17】

その議論の結果として、本当に大学の学修に必要な高大転換教育科目として、この初年次セミナーがあるべきではないかというのが一つ大きな結論でございます。ですから、学生が自ら自律的に学修していく、そういった姿勢が大学での学修であり、この初年次セミ

ナーに関しては、こういった能動的な学びに結びつくような高大転換教育科目として実施するのが望ましいという議論をしました。

もう1つ、シラバスを見ておきますと、まさに専門教育ではないかと思うようなセミナーの内容も見受けられます。専門教育であれば専門教育科目の中でやればよいということになりますので、あくまでも全学共通教育科目としての新生セミナー、初年次セミナーを考えるべきではないかというのが我々の考え方であると思っております。

では、大学での能動的な学びを養うためにどのような項目を初年次セミナーで取り入れたらいいのかということになりますが、やはりコモン・ベーシックと呼ばれる読むこと・書くこと・話すこと、こういった作業を通して学生自らが調べて、あるいは実際に文章を書いて、あるいは発表する、そういった作業を繰り返すことが能動的な学びの基盤をつくり、それが最終的に能動的な学修につながるのではないかと我々としては考えております。ですから、大学生活に必要な内容と大学でのいわゆる学修に必要な内容のすみ分けを少し考える必要があるという議論を昨年度、このアンケート結果からしました。

#### 【スライド18】

そのような議論もあって、今年度のシラバスには、初年次セミナーの紹介として、自律的に学修するための第一歩、これが初年次セミナーではないかということで、このような内容の文章を入れさせていただきました。

#### 【スライド19】

今回御紹介したのは、先生方において調査した結果の一部です。先ほど廣内先生から紹介もありましたが、学修支援部門のホームページに今回の報告書が掲載されております。どうか先生方もお時間があれば、ご覧いただければと思っております。

#### 【スライド20】

続いて、今年度実施しました学生を対象としたアンケート結果を次に紹介させていただきますと思います。

#### 【スライド21】

対象は、医学部を除いた4学部の学生にアンケートをお願いしました。医学部の学生は集中形式のやり方で既に初年次セミナーが終わってしまいましたので、医学部の学生に関しては今回データがないということで御了承いただきたいと思います。

#### 【スライド22】

質問した内容については、こちらが提示した項目の中から実際に初年次セミナーで実施した項目について、5段階評価をしてもらいました。また、初年次セミナーでは実施されなかったが、欠かせないと思う項目に関して丸をつけて回答してもらうという流れで行いました。

#### 【スライド21】

それ以外に、今回のこの初年次セミナーが高校までの勉強スタイルから、いわゆる大学での学習への転換に役立ったのかどうか、それから総合的に満足のいく初年次セミナーだ

ったのかどうか、アンケート調査を行いまして、対象学生1, 180名のうち750名から回答をいただきました。

### 【スライド23】

最初に受講した内容についての5段階評価ですけれども、これについては「非常に役立った」がブルー、「役立った」が赤のカラーです。それから緑は「どちらとも言えない」、紫が「役立たなかった」、ブラックが「全く役立たなかった」というような回答で評価をしていただき、その結果がこちらになります。これを見ていただきますと、ちょっとこれは個人的には意外でしたが、大学院生とか留学生、こういった外来の講師による講演会、これが「非常に役立った」、あるいは「役立った」と回答した割合が75%ぐらいになっております。学部別で見えますと、教育学部と応用生物科学部、この2つの学部が「役立った」と回答した割合が80%近くで非常に高い値でありました。

その他に、緑で囲みました項目が比較的役立ったと回答した学生の割合が多かったものになります。大体50%から60%ぐらいの数値が緑の項目に関しては「役立った」と回答しております。一方、この一番下の本の読み方とか、文献調査の仕方、これはちょっと5割を切る形で、割合としては少なかったという結果でございます。

### 【スライド24】

こういった各項目の中でぜひ取り入れるべき、取り入れてほしい項目を聞いた結果がこちらです。これも見てみますと、この真ん中に出てくるレポートの書き方、これを希望する学生の割合が他のものに比べて非常に高い結果でありました。入学して、すぐ講義等やはりレポートを要求されるというのは非常に多いのだらうと思いますが、そういった上で文章の書き方、レポートの書き方をぜひ早い段階でやってほしいという意見が反映されているのかなと思います。

### 【スライド25】

ちょっと余談になりますが、このレポートに関しては、ほかの大学でもこういった形で全学的なスキルアップを図るような授業が行われているようです。これはちょっと2010年で少し古い新聞記事ですけれども、山形大学では1年生全員に必修のスタートアップセミナーを開講させたということで、このセミナーの中でいわゆる文章の書き方とか、そういったものを行う授業を開講させたというのがこの新聞記事で紹介されています。これは全学体制で90人の教員が教壇に立って、レポートの書き方であるとかプレゼンテーションに関する授業を実際にやっているということです。またアンケートの結果に戻らせていただきます。

### 【スライド26】

次に、このセミナーが高校から大学への学習への転換、これに役立ったのかどうか、これを聞いた結果がこちらです。これが全ての学部を集計した結果でありまして、赤が「非常に役立った」と回答した割合、オレンジが「役立った」、薄い黄色が「どちらとも言えない」、それから薄い灰色っぽい色が「役立たなかった」、ブルーが「全く役立たなかつ

た」という回答です。全体で言いますと、大体この60%ぐらいの学生が「役立った」というふうに回答しております。学生が回答した5段階評価で、5点満点中で何点かというのを計算してみますと、大体3.6ぐらいのポイントになります。

では、学部はどうかと見てみますと、教育学部、それから地域科学部、この2つの学部は「役立った」と回答した割合が7割、あるいは8割近い、非常に高い結果でありました。ポイントのほうも4点に近い、あるいは4点を超えたような値が得られております。工学部は全体のものに比べると少し低いかないという感じです。応用生物科学部が全体とほぼ同じ、少し低いぐらいの結果でございます。

#### 【スライド27】

さらに、総合的にこのセミナーが満足のものだったのかを聞いた結果がこちらです。全体の回答としては、「おおむね満足」と回答した割合が大体65%ぐらいです。ポイントで換算しますと3.8ポイントぐらいです。教育学部、それから地域科学部、これらは先ほどの結果と同じように4点を超え、非常に高い満足度が得られております。それから工学部と応用生物科学部は大体全体の値と同じぐらいの割合ということになります。

全体で見ると、65%ぐらいの学生がおおむね満足ということで、私は正直、もっと満足度が低いのかなと思っていましたが、思いのほか高かったといえますか、各学部の先生方が、かなり努力されて初年次セミナーを実施されているのではないかと推察しております。

#### 【スライド28】

最後に、学生の意見として上がったものを幾つか書かせていただきます。これは主なものになりますが、この中に1つ、最後のほうに図書館の使い方をもっと早くやるべきとか、無駄ではないかという意見が幾つかありました。特に工学部の学生にこの意見が多くありました。これは図書館ツアーを初年次セミナーでやっていますが、どうしても工学部の学生の場合、人数が非常に多いということもあって、最後まで終わるのが6月中・下旬までかかってしまいます。ですから、もう既に入學してある程度時間がたってしまった段階で、こういった図書館ツアーをやっても少し意味合いが薄れて、このような意見が出ているのではないかと思います。

#### 【スライド29】

それでは、まとめです。下の2点が新しく追加したまとめになります。学生に関する満足度という点からすると、思いのほか高いのかなという感じがいたします。ただ、一方で不満足、満足していないと回答した割合の学生も10%ぐらいおりました。この辺はまた各学部で今後、必要に応じてセミナーのあり方を検討していただければと思っております。

先ほども紹介した図書館ツアーに関しては、今年度、初年次教育担当会議で少しやり方を検討して、次年度はこれまでとは違った方法を計画しております。ここに出ているアカデミック・コアというのが今年度、図書館の1階にオープンしましたので、

### 【スライド30】

こういったアカデミック・コアを一つ有機的に、有効に使った図書館ツアーを計画して、それを次年度は初年次セミナーに取り入れてやっていくことを考えております。

### 【スライド29】

それから、先ほど学生の回答で、大学院生とか留学生等による講演会、これは非常に満足度が高かったわけですが、この点に関してはどういったところが本当に彼らにとってよかったのか、もう少しちょっと詳しく調べてみたいというような気がしております。この辺は今年度、場合によっては次年度以降、解析をしていければと考えております。

### 【スライド31】

それでは、今御紹介した2つのアンケート調査結果について、昨年度から初年次教育担当会議で議論を重ねてまいりまして、一応ここに提言といいますが、若干具体性に欠ける提言になってしまっているかもしれませんが、こういったアンケート調査結果から、ここに掲げたような3つの項目、これについて今後初年次セミナーのあり方を考えてみたいと思っております。先ほども出てきましたけど、全学共通教育科目であり、やっぱりこれが一つ大前提としてあるのではないかという気がいたします。一番大事なものは、この真ん中の大学の学修、これに必要な高大転換教育科目、これをぜひこのセミナーの中で取り入れて実施することが非常に大事ではないかということです。それから、そのときに本当に大学の学生生活に必要な内容と、正規の授業で取り上げるべき内容、この辺が今の状況を見ると少しごちゃ混ぜになっている気がしておりますので、この辺は少しガイダンスのあり方も含めて、また検討していく必要があると考えております。

この後、グループ討論ということで少し時間を取っていますが、特に高大転換教育科目とすべきであり、こういったことについて先生方はどういうふうにお考えになっているか、あるいは実際にこういった目的のためにどんなものを行ったらいいか、その辺忌憚のない御意見をぜひお聞かせいただきたいと思っております。

### 【スライド32】

最後になりましたが、これは京都大学の第16代総長の平澤興先生が“教育とは”ということで、「火をつけて燃やすこと」だと言っております。初年次セミナーというのは、本当に1年生、最初に学生が共通で受講する科目になります。我々初年次教育担当としては、ぜひこの初年次セミナーが学生に火をつける、そういったきっかけの科目として各学部で今後実施していただきたいというのを願っております、最後に紹介をさせていただきました。


### 【スライド33】

これが我々学修支援部門・初年次教育担当のメンバーになります。以上です。どうもありがとうございました。

教育推進・学生支援機構 学修支援部門  
初年次教育担当会議主催FD

「どうする！？ 初年次セミナー」

**初年次セミナーのアンケート調査から  
見えてきたこと**



学修支援部門・初年次教育担当会議委員長  
海野 年弘

**セミナーの変遷**

約30年前 教養部の時代に「教養セミナー」開講  
…全学の学生対象  
(専門とは別に教養を重視、大学生活への定着)

⋮


平成23年度(2011)年度以前:各学部によるセミナーの開講  
工学部:「フレッシュャーズセミナー」  
それ以外の学部:「教養セミナー、新入生セミナー」

平成24年度(2012)年度以降:全学共通教育科目として  
**「初年次セミナー」**を開講

**初年次セミナーのシラバス**

初年次セミナーでは**高校生から大学生に変わるために必要な知識や心構え**を学びます。大学生としての**学習**を身につけ、岐阜大学にある様々な施設の利用の仕方を修得して下さい。少人数クラスで大学の教員と直接ふれあうことができます。初年次セミナーの内容は各学部・学科により様々で、工夫されています。この科目により、充実した4年間ないし6年間の学生生活のスタートを切して下さい。

履修案内・授業案内  
2012  
新入生



**各学部で実施されている初年次セミナー**

<b>教育学部</b>	<b>地域科学部</b>	<b>工学部</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教育・国語</li> <li>● 教育・社会</li> <li>● 教育・数学</li> <li>● 教育・物理</li> <li>● 教育・化学</li> <li>● 教育・生物</li> <li>● 教育・地学</li> <li>● 教育・音楽</li> <li>● 教育・美術</li> <li>● 教育・保健体育</li> <li>● 教育・技術</li> <li>● 教育・家政</li> <li>● 教育・英語</li> <li>● 教育・教職</li> <li>● 教育・心理</li> <li>● 教育・特別支援</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 地域・人見セミナー</li> <li>● 地域・宮野セミナー</li> <li>● 地域・中川セミナー</li> <li>● 地域・三井セミナー</li> <li>● 地域・南出セミナー</li> <li>● 地域・向井セミナー</li> <li>● 地域・竹内セミナー</li> <li>● 地域・近藤セミナー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 工・社会基盤工学</li> <li>● 工・機械工学</li> <li>● 工・化学・生命工学</li> <li>● 工・電気電子・情報工学(A)</li> <li>● 工・電気電子・情報工学(B)</li> <li>● 工・電気電子・情報工学(C)</li> </ul>
	<b>医学部</b>	<b>応用生物科学部</b>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 医学科</li> <li>● 看護学科</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 応生・向井セミナー</li> <li>● 応生・日巻セミナー</li> <li>● 応生・小山セミナー</li> <li>● 応生・中川セミナー</li> <li>● 応生・霞谷セミナー</li> <li>● 応生・前澤セミナー</li> <li>● 応生・北川セミナー</li> <li>● 応生・丸尾セミナー</li> </ul>

平成26年度シラバスより

**各学部における初年次セミナーの特徴**


学部	セミナーの内容・特徴
教育	講座ごとの授業内容 (専門教育への橋渡しの内容)
地域	担当教員ごとの授業内容 (グループワーク・課題解決型授業)
医	共通教育メニューの実施 (グループワーク・教員個別セミナー)
工	学科ごとの授業内容 (専門教育への橋渡しの内容、課題解決型授業、プレゼンテーション、講演会)
応生	共通教育メニューの実施 (日本語教育、教員・大学院生・留学生による講演)

**全学共通教育としての初年次セミナー**

全学共通教育科目とした目的:  
大学での**学修に必要な基本的事項を教授する  
高大転換教育科目**

- FD研究会(平成25年7月実施)  
「大学初年次の共通教育と学修支援」
- ワークショップ(平成25年10月実施)  
「初年次セミナーの共通性を探る」
- 初年次セミナー授業計画案  
学部にとらわれない共通性の高い授業項目(10回分)の提示

### 初年次セミナー授業計画案



1. 健康管理について(『健康ナビ』)
2. 図書館の使い方(図書館ツアー)
3. キャンパス・ガイド  
(『CAMPUS GUIDE』)
4. 防災・危機管理について
5. 大学で勉強する方法  
(『教養ブックレット・  
大学で勉強する方法』)
6. 本の読み方  
(『教養ブックレット・  
人生を決めた書物』)
7. レポートの書き方  
(『岐阜大学性のための日本語  
表現練習ノート』)
8. 英語の学び方  
(『教養ブックレット・  
大学で使える英語を学ぶ方法』)
9. 発表の仕方
10. 岐阜について学ぼう

### 初年次教育担当会議の活動

初年次セミナーをよりよくするために…

- 26年度  
初年次セミナー担当者(コーディネーター)に対するアンケート調査の実施  
…教員が必要と考える授業内容は何か？  
問題点は？
- 27年度  
初年次セミナー受講生に対するアンケート調査の実施  
…学生が必要と考える授業内容は何か？  
問題点は？

→ 初年次セミナーのあり方についての提言

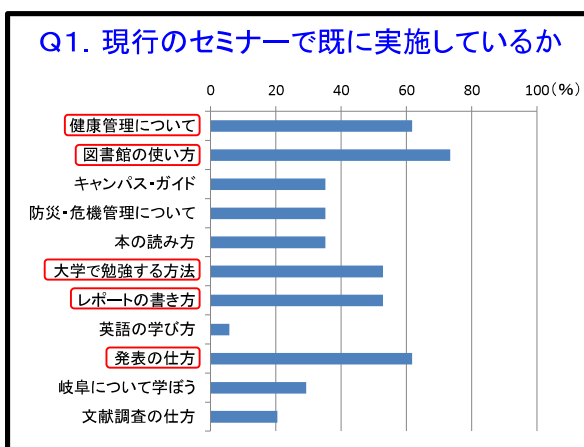
### 平成26年度 担当教員(コーディネーター)を 対象としたアンケート結果

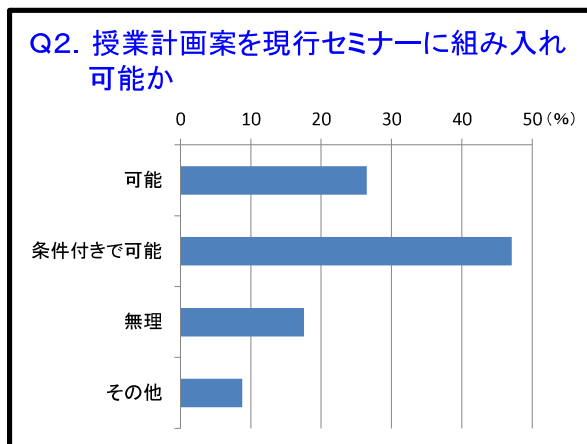
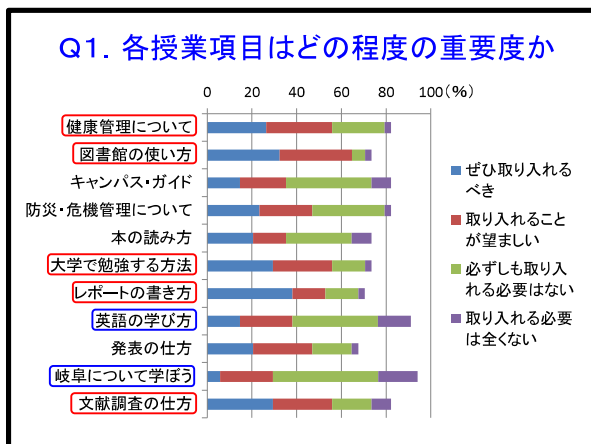
### アンケートの実施方法および回答率

- 対照: 初年次セミナー担当者、あるいはコーディネーター教員
- 質問項目:  
Q1. 授業計画案にある項目を現行のセミナーですすでに取り入れているかどうか、その重要度はどの程度か  
Q2. 現行のセミナーでは実施していない授業計画案を取り入れることは可能か  
Q3. 可能であれば授業項目はいくつ位まで組み入れ可能か  
Q4. 授業計画案以外で取り入れるべき授業内容は何か  
Q5. その他意見・要望等
- 回答率: 40名の教員に依頼し、34名より回答(回答率: 85.0%)

### Q1. アンケート調査項目

講義内容	現行のセミナーで既に実施している	重要度			
		ぜひ取り入れるべき	取り入れることが望ましい	必ずしも取り入れる必要はない	取り入れる必要は全くない
健康管理について					
図書館の使い方					
キャンパス・ガイド					
防災・危機管理について					
本の読み方					
大学で勉強する方法					
レポートの書き方					
英語の学び方					
発表の仕方					
岐阜について学ぼう					
文献調査の仕方					





- ### Q5. 意見・要望等
- 学部・学科ごとに自由度のある講義にしてほしい(他7名)
  - ガイダンスでやるべき内容が入っている(他4名)
  - 画一的な内容をやるべきではない(他2名)
  - 初年次セミナーの位置づけ、目的が曖昧(他2名)
  - 1年間を通して実施すべき
  - 初年次セミナーは大学教育への導入として極めて重要
  - 機構から講師を派遣してほしい
  - 学生に勉強の必要性を感じ取らせる内容が重要
  - 授業のセミナーで実施すべき項目のミニマムリクアイアメントを提示してほしい
  - メモの取り方から教えるべき
  - ...

### 初年次セミナー授業計画案

1. 健康管理について(『健康ナビ』)
2. 図書館の使い方(図書館ツアー)
3. キャンパス・ガイド (『CAMPUS GUIDE』)
4. 防災・危機管理について
5. 大学で勉強する方法 (『教養ブックレット・大学で勉強する方法』)
6. 本の読み方 (『教養ブックレット・人生を決めた書物』)
7. レポートの書き方 (『岐阜大学性のための日本語表現練習ノート』)
8. 英語の学び方 (『教養ブックレット・大学で使える英語を学ぶ方法』)
9. 発表の仕方
10. 岐阜について学ぼう

大学生生活を含めた 高大転換教育

- ### まとめ
- 初年次セミナーの理念・目的  
“**全学共通教育科目**” “**学修の高大転換教育科目**”
  - 高大転換教育科目としての授業内容  
大学での学修: “**能動的**”な学び  
能動的学修の基盤となるような**コモン・ベーシック**が必要
    - 読むこと(調査、把握)
    - 書くこと(レポート作成)
    - 話すこと(討論、発表)
  - 大学生生活に必要な内容と大学での学修に必要な内容の棲み分けが必要

### 全学共通教育科目 初年次セミナーを履修するにあたり ~自律的に学修するための第一歩~

履修案内 シラバス 2015

講義の中で生じた「なぜ?」という疑問点について、調べたり考えたりすることで、自ら“**知**”を作り上げていく“**能動的**”な学びこそ、**大学で求められる「学修」**です。  
初年次セミナーは、このような転換がスムーズに進むよう設けている科目です。



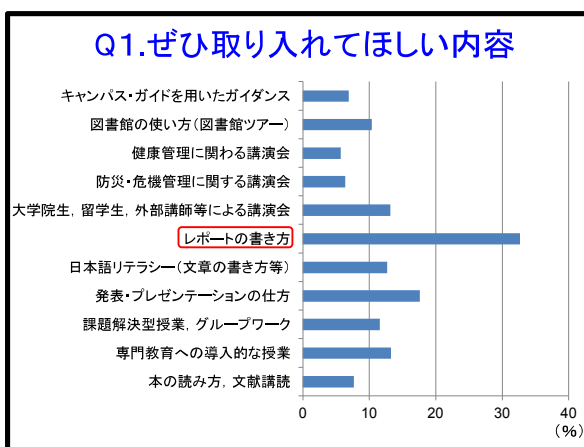
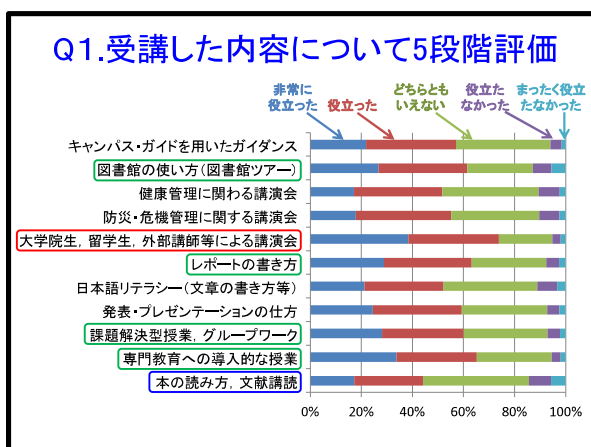


平成27年度  
受講生を対象としたアンケート結果

- ### アンケートの実施方法および回答率
- 対照: 初年次セミナー受講生  
(教育学部、地域科学部、工学部、応用生物科学部)
  - 質問項目:
    - Q1. 受講した内容について5段階評価、初年次セミナーに欠かせないと思う内容
    - Q2. 「初年次セミナー」を受講したことが、高校までの勉強のスタイルから大学での学修へと転換することに役立ったか
    - Q3. 今後ぜひ取り入れて欲しい内容
    - Q4. このセミナーは総合的に満足のいくものだったか
    - Q5. その他意見・要望等
  - 回答率: 受講生(1180名)に依頼し、750名より回答(回答率:63.6%)

### Q1. アンケート調査項目

セミナー内容	5段階評価	ぜひ取り入れて欲しい内容には○
キャンパス・ガイドを用いたガイダンス		
図書館の使い方(図書館ツアー)		
健康管理に関わる講演会		
防災・危機管理に関する講演会		
大学院生、留学生、外部講師等による講演会		
レポートの書き方		
日本語リテラシー(文章の書き方等)		
発表・プレゼンテーションの仕方		
課題解決型授業、グループワーク		
専門教育への導入的な授業		
本の読み方、文献講読		
その他①[ ]		
その他②[ ]		



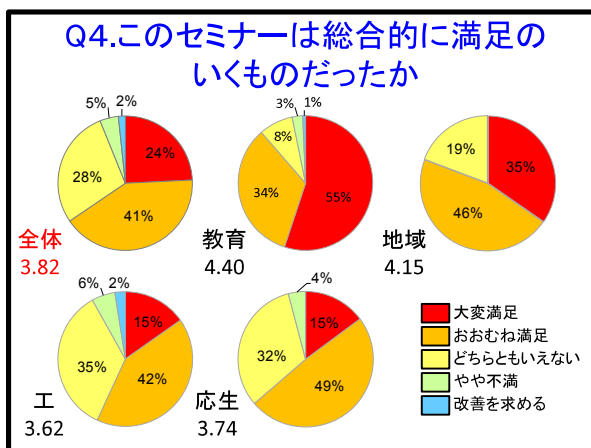
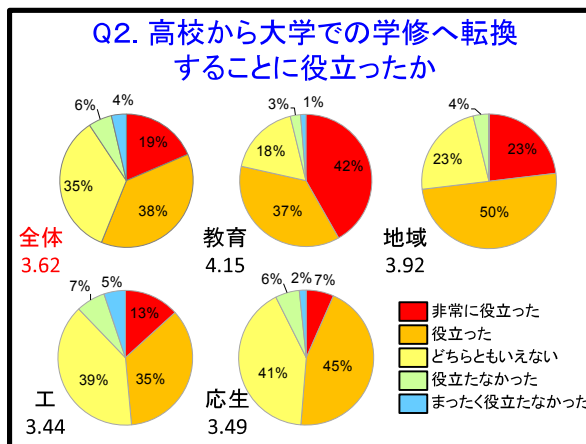
### 脱「やばい」レポート

山形大、書き方必修講座

学習スキルの武上げ図る

1年生全員必修のスタートアップセミナーを開講させた。

学科別に1クラス平均30人(計55クラス)の少人数教育で、約90人の教員が教壇に立つ。学部・学科に沿うテーマでレポートを書き、プレゼンテーションをする授業になる。



- ### Q5. 意見・要望等
- 自分で作り上げていく授業は楽しかった
  - 他の講座の学生との交流がしたい
  - 大学生に必要な知識がついた
  - 論文を書く上で大切なことを学ぶことができた
  - レポートの書き方をもう少し詳しくやってほしかった
  - いろいろな人の話を聞くことができてよかった
  - 研究室での研究内容を知りたい
  - プレゼンテーションのやり方を知りたかった
  - 専門的な授業はレベルが高すぎた
  - 図書館の使い方はもっと早くやるべき、無駄
  - 5時限目にやるのはやだ
  - ...

- ### まとめ
- 初年次セミナーの理念・目的  
“**全学共通教育科目**” “**学修の高大転換教育科目**”
  - 高大転換教育科目としての授業内容  
大学での学修: “**能動的**”な学び  
能動的学修の基盤となるような**共通・ベーシック**が必要  
    - 読むこと(調査、把握)
    - 書くこと(レポート作成)
    - 話すこと(討論、発表)
  - 大学生活に必要な内容と大学での学修に必要な内容の棲み分けが必要
  - 図書館ツアーを再構築すべき  
(アカデミック・コアの活用、文献調査の要素)
  - 大学院生、留学生、外部講師等による講演会

### 創造的☆学習広場

## アカデミック・コア

— 学びは仲間と創造すれば楽しくなる —

academic core

#### アカデミック・コアとは?

アカデミック・コアは、大学生活のみなさんが、学びコアを活用して学習するための空間です。自主ゼミや読書会を開くにも、グループで勉強会に取り組むにも、お互い質問をやりあう、やりあうことで学びが深まります。おしゃべりしながら勉強することでも、もっともっと広く、深い学びへとつながる。そんなスペースに生まれたい。という思いをこめてオープンしました。

### 初年次教育担当会議からの提言！

初年次セミナーは…

- 全学共通教育科目である
- 学修の高大転換教育科目とすべきである
- ガイダンスと正規授業でやるべき内容の棲み分けをすべきである



平澤 興(1900—1989)  
京都大学第十六代総長

教育とは…

火をつけて燃やすこと。

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/president/successive>

### 学修支援部門・初年次教育担当会議

部 門 長 : 加藤 直樹 (総合情報メディアセンター)  
専任教員: 廣内 大輔 (教育推進・学修支援機構)  
委 員 長 : 海野 年弘 (応用生物科学部)  
委 員 : 根岸 泰子 (教育学部)  
委 員 : 近藤 真 (地域科学部)  
委 員 : 竹下 美恵子 (医学部)  
委 員 : 森田 洋子 (工学部)  
委 員 : 今福 輪太郎 (医学教育開発研究センター)  
事務担当: 畔柳 和久 (学務部教務課)  
事務担当: 佐藤 晃 (学務部教務課)

## グループ討議

司会：廣内 大輔

(教育推進・学生支援機構 准教授)



【司会（廣内）】 それでは今から初年次セミナーをどうするかということで、グループ討議をしていただきたいと思います。大体1つのグループが6名くらいになるように、机をくっつけて、その上に模造紙などを置いて話し合っただけだと思います。グループ討論自体は、これから20分間を予定しております。20分間が終わった後に、それぞれのグループごとに結果を紹介し合う時間を設けたいと思っております。各グループには、学修支援部門の初年次教育の担当の教員が、入るようにしていきたいと思っております。

話し合いの観点ですが、先ほど2枚前のスライドにありましたように、赤い3つ、もちろんこれに過度にとらわれる必要はありませんが、こういったところを参考に意見交換をしていただければと思います。よろしく願いいたします。

(グループ討議)

【司会（廣内）】 それでは、そこまでにしていただけますかね。ちょうど20分たちました。それでは、それぞれのグループでどういう意見が出されたのか、余り時間が取れなくて恐縮ですが、それぞれのグループから簡単に御報告して、皆さんで共有できればと思います。

【グループ1】 我々のグループでは、全く話はまとまっていませんが、最初に出た意見は、山形大学で先ほど海野先生から御紹介いただきましたが、それともう1つ、三重大学のほうでも初年次セミナーの改革がうまくいって予算化されているのに、岐阜大学ではどうしてうまくいかなのか理由をもっと考える必要があるとのことでした。そのためにマネジメントをやはり機構である程度、指示を出す必要があるという意見が出ました。

それから、あともう1つは、学生の健康管理の共通部分です。これも今、学部から特に要求はありませんが、担当されている先生からは、学部によって内容を変えて、その学部に合った内容で話をしているけれど、そこについても学部から今後外部の先生に依頼するとしたら、どんなことを話して欲しいのか内容を学部で真剣に考えて依頼する必要があるのではないかという意見が出ました。

それから、最低限の生活能力をどのように備えるのかということなので、これは運営の

仕方等も考える必要があるという意見が出ました。

あと、マネジメントに関しては、かなり学部によって違うので、人数とか費用とか方向性とか進めていく必要があるかということです。

それからあと、この真ん中の項目の学習の高大連携科目という点について、応用生物科学部で今までどんなことをやってきたのかという話の中で、高校でのアクティブ・ラーニング教育は進んでいるので、これを取り入れるとしたときに、やはりスピード感が必要だろうという意見が出ました。

【グループ2】 こちらのテーブルは医学部看護学科の教員が大半で、あと2名の応用生物科学部の先生方でした。

話題に出ていたのは、高大転換教育ということですが、学生が、答えを求めることが多かったり、失敗が許されないような価値観を持っているのは、入試制度にも問題があると意見が出ていました。さらに、受け身の教育を求める学生にどう対応するかとか、生活力が非常に乏しく、経験不足の学生達で、今まで共通言語として通じていた言葉がわからない、教員が当たり前話すことがわからない学生にどう対応していったらいいだろうかが話題になりました。初年次セミナーで日本語表現ということで取り組んでも、学生自身が「高大転換が必要」という意識を持っていない、自分たちはできていると思っているので、すごくモチベーションが低かったという現状報告もありました。まとまりがありませんでしたが、様々な課題が出されました。以上です。

【グループ3】 こちらは3人で話し合いました。最初はガイダンスと授業とは違うよね、という話がありました。ガイダンスでは1回しか話せないし、初年次セミナーで14、5回はできるけれども。最初の教養部時代に、ちょうど29年前、僕が大学に来たときに教養セミナーが始まったのですが、学部を完全に横断でやっていたのです。つまり、他学部の学生と交流する機会だった。いろんな学生とお互いに会って話すみたいな、当時はまず緩やかなところから大学の教育の中に入っていくというやり方もあるかもしれないですね。

もうひとつは、共通した初年次セミナーの形式をつくったらという提案もありました。我々の文系の感覚でいうと、ちゃんと本を読んで報告・議論してレポートを書くなんていうのは、1回テーマを聞いて、今日はレポートを書いていた、今日はプレゼンの仕方なんて絶対続くわけがないんですよ。だから、そのやり方は多様であっていいと思います。応用生物科学部だと、何か長老が出たり若手が出たり、経験者が出るのいいのか、学生と年齢が近い人がいいのかいろいろあると思いますが、地域科学部は最初はローテーションで回しているいろんなメンバーが出ていたんで、その辺もいろんなやり方があるかもしれないですね。

それから、もう1つ大きいのは、高校から大学へ転換教育ということで、いかにも何か高校教育がだめみたいな、余りいい言葉ではないと思いますが、それは受験側だってそうになっているからだけであって、実は小学校・中学校で今の学生はグループワークをよくやっているから、こういうワークショップやグループワークは得意なんですよね。だか

ら、やらせるとすぐさっさとやってしまう。先生なんかよりずうとうまいですからね。だから、それがちょっと一度切れているやつをもう一度大学でやれるようにしてあげて、アクティブ・ラーニングもだし、場合によっては地域へも出ていってもいいとか、そういう教育につながっていくといいのかなと思っているわけです。以上です。



【グループ4】 私たちのグループでは、何点か意見が出ましたが、基本的に機構の役割ということも含めて、初年次セミナーというのは、こちらのレジユメの最後のページ、この最初のところに出ているような提言の部分、最初はこれを中心に議論しました。やはり最低限の目標値みたいなものを、それぞれの学部に掲げかけるというのが機構の役割じゃないかなということ私が申し上げ、それをめぐっていろいろ話が出て、先生方からもいろいろな提言をいただきました。

例えば、この初年次セミナーという科目のイメージとして、アメリカのリベラルアーツと、それから専門家も含め両方の組み合わせというイメージをこの初年次セミナーの中にも取り入れるということもできるのではないかと、という意見。あとは実際に魅力のある講義内容ということで、TAの活用という、これもアメリカの事例でしたが、教え方というのをまず習得したTAを、全ての時間は無理でも、少しずつ活用していくというようなこともできるのではないかと、魅力的な御提言をいただきました。

ただ、最後に工学部の先生方から教えていただきましたが、結局のところ、いろいろやりたいことがあっても、工学部の場合はクラス単位がすごく大きく、1つのグループが80ないし150と、これは私たち教育学部とはもう桁が違うわけで、これはもう内容云々よりもそのシステムの問題というのでしょうか、少し別問題として考えていくかという、ちょっと性質の違う問題で大変重要な部分ではないかと思いました。ありがとうございました。

【グループ5】 私たちのグループは、受け入れについて議論しました。まず全学共通の科目であるというところで、全学共通教育とは何かということで、例えば工学部でやっている授業からすると、初年次セミナーでは学科のおもしろさから勉強に火がつくような、火をつけて燃やすことが教育だということであれば、学科のおもしろさを伝えて、目的意

識を学生に与えることを追求してゼミをやろうとしてきた中で、もっと教養的なものが補足されていくということが必要ではないかということです。

我々が教養部時代にやっていたのは全学の学生がごちゃまぜになって参加するゼミだったので、医学部の学生も、工学部の学生も、応用生物科学部も教育学部もみんなそこで共通に議論できる材料を問題にして、教育問題とか、マスコミ問題とか、医療とか、例えば環境問題とかいうものを材料にしてみんなでいろんな文献をあさっては発表する。そういうことで医学部の学生はこう考える、工学部はこう考える、同じ問題を議論するとかなり教養的な、全体を共通するような普遍的テーマにどんどん押し迫っていきけるんです。しかし、今は学部ごとに分かれているため、どうしても基礎ゼミになると、教養ゼミではなくて、そこからどういうふうにより一般的な、より教養的なものを追求していくかということが一つの課題かなという意見が出ました。

それから、学生との間での議論が少し、特に先輩・後輩間とか、ほかの学部との関係ももちろんそうなんです、先輩・後輩間でも学生たちの議論が非常に希薄であると、そういう面でいくと、もっとサポーターの制度などもう少し、OSCとかいろいろありますけど、TAとかSAとかをもっと何とか利用できないか。それは前の話でもありましたが、TAをもっと利用できないのかもう少し考えて、お互いに学生同士が助け合うような制度をもっと入れたらどうかということになりました。

工学部の先生の話では、自主ゼミや自律的な学習というところで非常に今後重要なことが課題としてありますが、そのときに、全体ではあまり自主ゼミみたいなものは行われていませんが、実はよく見るとそういう試みが結構たくさんあります。それは、授業と授業との間に学生たちが集まって結構議論していて、そのときに、一種の自主ゼミ的な状況というのが起こっているということです。そこに助言教員がサポートして、うまく誘導するというか、制度化というか、そういったような状況もあるということです。だから、そういう面でいくと我々の中での自律的な学習とか、学生たちの育ち方というのはもう少し多様な要素を見ていくべきではないかと私は感想として持ちました。

あと、障害者の学生の皆さんについても、どういうふうにして学生同士で助け合ったり、教員が注意をするのかということでお話がありましたが、またそういうのを詳しく御議論していただければと思います。以上でございます。

【司会（廣内）】 ありがとうございます。短い時間でありましたけれども、いろんな課題等、さらにそれについての御意見をいただけて、このグループ討論を設けて良かったと思っております。

## 講演 2

### 初年次セミナー改革の試み ー応用生物科学部の取り組みー



杉山 誠

(応用生物科学部・副学部長)

応用生物科学部の杉山です。今日は、このようなところで話しする機会をいただきまして、ありがとうございます。最初に、なぜこんなことを始めたのかというところから、実際どんなことをしたかという流れでお話しさせていただきたいと思います。

#### 【スライド 2】

まず、これは皆さんもごらんになったと思いますが、ベネッセが行った大学基礎力調査です。進路の条件の明確化、すなわち将来像をどのくらい明確に持っているかを縦軸に、学びへの意欲の程度を横軸に置いたものです。全学の平均として、1年生から2年生の間で両者ともに程度が下がっています。応用生物科学部においても、同様に応用生命科学課程、生産環境科学課程ともに同じように下がっています。獣医も全体的に高い程度ではありますが、やはり下がっていきます。すなわち、入ったときは将来を目指して学びに燃えているのに、2年生になるといずれも下がってしまうという状況が見えてきます。

#### 【スライド 3】

大学基礎力調査をもう少し見ますと、入学理由に「学びたい学問分野がある」を挙げる学生さんの割合が、応用生物科学部は90%以上あります。これは他学部に比べても非常に高い割合です。広報がいいのか、理由はよくわかりませんが、非常にありがたいことではあります。最初のイメージはとても素晴らしいわけです。生産環境に至っては悪いイメージは全くないというぐらいです。これが2年生になるとどうなるかというと

#### 【スライド 4】

このようになってしまいます。緑色の「悪い」が多くなっているのがわかると思います。どの学部も緑色の「悪い」が多くなるのですが、応用生物科学部は当初良かった分、イメージの落ち方が大きいと考えることができます。

#### 【スライド 5】

生産環境科学課程に至っては「悪い」イメージがゼロだったものがここまで上がってしまいます。それでは、一体この1年間で何が起きているのだろう、これが最初のスタートとなります。



【スライド5】

イメージが悪くなった理由についても、この基礎力調査では問いかけています。一番多い理由として、「興味のある科目が少ない」学部の44%、生産環境科学課程では半数がこの回答を選んでいました。それでは、専門科目を入れればいいのかというと、「専門科目が少ない」を選んでいる学生さんはおらず、どうもそうでもないようです。ということから、全学共通教育、教養教育、導入教育、すなわち初年次教育について考える必要があるのではないかと考えたわけです。私たちの学部では、教育改善室というのを設けていますので、そこで検討を始めました。

【スライド7】

まず教育改善室について、ご紹介します。このスライドは認証評価にあたり、教育改善に関して教育推進・学生支援機構に提出した昨年度の報告書です。様々な教育の課題について解決を図るために、学部長を室長に、副学部長、事務長、事務長補佐と事務も含めて執行部でつくっている組織となります。教育に関係する学部の委員会に、副学部長が配置されています。入試委員会ですと私ですし、大学院委員会は向井先生といった形です。各委員会で問題となったことを教育改善室に吸い上げながら、この室で検討を行い、必要に応じてワーキンググループを立ち上げ、速やかに改善を図るというように進めていきます。

先ほどお話させていただいたような経緯があり、この教育改善室の下に初年次教育に関するワーキンググループが立ち上がりました。ここで、本日のテーマである初年次セミナーについて検討し、今年、組織的な初年次セミナーを試みました。さらに、この結果について検証し、次年度に向けて改善計画が固まってきている状況です。これらの活動を総括し、学部教職員間で情報や課題の共有化を進めるために、年度の終わりに関連のシンポジウムも実施しています。これは公開で開催していますので、興味のある方には参加していただき、ディスカッションにも加わっていただくと大変有り難いと思います。今回は教育に関するだけでなく、本学の重点課題である地域連携もテーマにしています。

【スライド6】

初年次、特に教養教育に関するワーキンググループに、当時の教学委員長の土田先生、前任の早川先生が入り、杉山が取りまとめることとなりました。実際に教養の授業も聴講させていただき、共通教育の改革案を提出いたしました。物議を醸しましたので、ご記憶の方もいるのではないかと思います。残念ながら、これに関しては受け入れていただけませんでした。それでは、今、自分たちでできることは何だろうということになりまして、初年次セミナーの改革という流れになったわけです。このワーキンググループには、土田先生に加え、当時の教学委員長の海野先生、次期の委員長の岩橋先生というように、歴代・次期の教学委員長に入っただいて、私を取りまとめるという形で初年次セミナーの改善の検討を進めていきました。

【スライド8】

まず、これまでの初年次セミナーの検証を行いました。その結果、日本語教育が一つの

キーワードで出てまいりました。そこで、教育学部の山田敏弘先生にご指導いただきながら改革の方向性について検討を進め、夏過ぎの9月の教授会でこの方向性を承認していただきました。最終的に年明け1月の教授会で具体的な改革案を認めていただいています。年度終わりに担当者、それから、開講1週間前にTAも含めた全体での打ち合わせという形で開講準備が進められました。ワーキンググループ4名に、中川先生、柳瀬先生、清水先生、大西先生の4名が加わり、TA24名と合わせて、担当者総勢32名となりました。以上が、実施に至る経緯となります。

#### 【スライド9】

ここから、実際に教育改革をどのように進めたかについて、その詳細をお話いたします。最初に、先ほどの教養教育の改革案をどうして提案することになったのか、からご説明いたします。

#### 【スライド10】

その当時、何が起きていたかという、教養科目の充実という理由で非常勤講師の科目が増えていっていました。これに伴って経費負担というのが、工学部、それから応用生物科学部に来ていました。ちょうど電気代の高騰と重なって非常に苦しい時期です。これも平成27年度に見直すという話でしたので、教育改善室において共通教育の検証を行って提言をまとめることとなり、最初のワーキンググループが動き始めました。

まず調べたのが、どのような受講状況かということです。学生がどのような科目をとっているかというのを拾い集めて調べてみました。驚いたことに、いわゆる硬いと言うか、私たちが思い浮かぶ教養科目、哲学とか倫理学とか経済とか、こういった科目をとっていない学生が7割、8割いるということがわかってきました。これでいいのだろうかというのが、まず大きな疑問として出てきました。

当時、大人数の授業は良くないという理由から少人数の授業へという流れもありました。これも授業数が増える理由であると考えられます。そこで、本当に大人数の授業は駄目なのかという疑問から、大人数の大教室の授業を、それも学生から評価の高い講義を中心に、担当の先生にお願いして聴講させていただきました。そうしますと、素晴らしい講義をされている先生が多く、学生も熱心に聴き入っていました。別に大人数だから駄目ということはないと実感することとなります。一方で、つまらないと感じる授業では、スマホに夢中の学生を多くみました。ということから、当然なのですが、学生が聴きたくするような内容を学生に提供することは、個々の教員だけでなく、私たち教育に携わる組織の責任ではないかと強く感じました。この責任の観点から考えて、共通教育がラインアップされているか、正直なところ疑問です。

#### 【スライド11】

教養教育であっても、やはり大学生として受けて欲しい科目があるのではないかと、ということからコアカリという発想がでてきました。ここに、素晴らしい授業をしていただける先生を、責任をもって配置することにより、効率かつ効果的な教養が実現できるのでは

ないかと考えました。これが、学部で必要と考える教養科目のコアカリ化という提案につながります。

続いて、初年次セミナーです。入学時には、個人の能力や経験に大きな違いがあるように思います。そうなりますと、やはり少人数で、個を見た形で高校から大学へしっかりつなぐ、さらに、この先にある社会を見据えた教育にしなければならないと考えたわけです。これには、ある程度の教員の数が必要になります。教養科目のいくつかをコアカリ化することにより、科目数を減らし、この担当されていた先生に、こちらに回っていただければと考えました。

次に語学教育、特に英語です。シラバスの冊子を見ますと、冊子の大部分を英語のシラバスが占めていて、バラバラの内容が書かれています。でも、選択できるわけでもなく、あてがわれているわけで、これで大丈夫なのだろうかと思えます。やはり、少なくとも学部単位では、教育目標を統一してシラバスを統一する必要があるのではないのでしょうか。

このようなことを色々考えて行きますと、結局全員出動という中で「できる教育」をやってきた、全学出動態勢というところに根本的な間違いがあるのではないかという話に至りました。教養部廃止にともなって現実的な対応として始まったのが、共通教育への全教員出動という考え方です。教育の質を問われている今、そろそろ考え直す時期ではないかと思えます。要するに、「可能な教育」から「必要な教育」へと転換を図らなければならないのではないのでしょうか。

これらの具体策として、この4つの科目群、必修科目、選択科目、初年次セミナー、語学科目を考えました

必修科目では、これから生きていく上で、社会人として必要な基礎知識というものをしっかり学修すべきではないか。これがコアカリです。ただし、そうは言いながら、教養というのは、豊かさとか、生活の知恵といったものもありますので、そういったものは選択科目でフォローしていきます。それから、初年次セミナーでは、何が基盤かということをしきりと捉えながら、少人数で個を捉えて高大接続を考えたらどうでしょうか。それから、英語に関しては、例えば我々の学部であれば、TOEICといったものを目標に、実践的な英語を学習させてもいいのではないかと考えました。

この提案に対しまして、ご存知の方もいるかと思いますが、かなり物議を醸して、そして多くの批判をいただきました。結局、教養教育推進センターより現状維持に近い提案が出てきて、私たちの提案は潰れました。しかし、それでは何も解決しないということを意味します。そこで、このうち自分たちで出来ることはないかということから、初年次セミナーについて検討を開始することとなりました。

【スライド12】 【スライド13】

まず、現在行われている初年次セミナーがどうなのかという検証から始めました。これの検討には、土田先生に加え、海野先生、岩橋先生に入ってくださいました。これまでの初年次セミナーでは、1年生の前期、25名程度の8クラスに分かれて、各先生がその裁

量でさまざまな目標を掲げながら授業が構成されていました。例えば、幅広い視点からを目標とする先生もいれば、専門分野の視点から有機化学を教えている先生もいました。課題探求、自学自習、視野の拡大、それぞれ素晴らしい目標を皆さん掲げていて、一生懸命工夫されて授業をされていることが分かりました。

5段階評価の学生による授業評価を見てみますと、上は「4.89」ですから相当高い授業もありますし、一方で「3」と問題かなというような授業もあります。どのクラスになるかは希望と調整で決まっていたので、良い授業にあたるかどうかは運による部分も大きいかもしれないということになります。

各教員で、さまざまな工夫と努力をされているということがよく理解できました。これに対しては敬意を表さないといけないと思います。しかし、先生方にお任せして、とにかくやってねという感じでいいのかです。また、課程によっては、人生経験豊富なリタイア間際の先生が担当だったり、やはり学生に近い若い人のほうがいいでしょうと若い先生だったり、いろいろな考え方がここにはあることも分かりました。

そこで、導入・高大転換とは何か、これをきちんと見定めた上で、目標を設定して、初年次セミナーを再構築しようということになったわけです。また、今まで個々の力に頼り過ぎていた個人戦を、何とか組織・集団戦に持っていきたい。これはポイント削減という中で教員も減っていますので、より効率的という観点からも重要なのではないかと考えました。

#### 【スライド14】

まず、導入・高大転換のために何をするかです。どうやって自分で勉強するか、大学はもちろん社会に出たら自分で勉強していかなくてはならないわけですから、そういった力をどうつけるのか、基盤となるような能力をどうつけるのか、国際化も一つのキーワードだろうということになりました。入学時の能力に違いがあることを考えますと、やはり少人数、できるだけ個を見ていく必要があります。

続いて、基盤的能力とは何なのかというところで議論をしたのですが、その中で、卒業論文を書かせているときに日本語を書けない学生が結構いる。結局、日本語ができない、例えば主語・述語がわからないような学生は英語もできないでしょうし、社会へ出て報告書一つ書けないでしょう。そこで、ここでは日本語教育をきちんとしようということになりました。

それから、導入という意味では、やはり大学の面白さを伝えるべきだと。それでは、大学の面白さって何なのかと考えますと、やはり研究です。では研究の面白さについて、先生が話しても多分なかなか伝わらないだろう、どこかの「じじい」が何か一生懸命話しているぐらいに感じるくらいかもしれません。そこで、身近なお兄さん、大学院生が「こんなに面白いよ」、「大学の勉強ってこういうふうにするのだよ」ということを言えば、それなりにリアルですし、彼らも耳を傾けるのではないかと、ということから大学院生を活用しようということになりました。

国際化ですが、実は身近にたくさん留学生がいて、その方にお話をしてもらえれば、これが一番ではないか。そこで、留学生にお話をしてもらうことにしました。そうは言っても、先生たちに本格的な研究の話も必要だろうと、分かりやすく魅力的な研究活動を話していただくようお願いして、プログラムの中に組み込みました。

それでは、具体的にどうしたかです。少人数といっても先生の数は限られていますので、学生を活用しながらの少人数を目指しました。T A・S Aを活用するということです。そうすると予算が必要になります。ここで執行部が動いているところのいいところが出ます。教育改善室というところで経費を検討し、予算化できたということです。ただし、全学的にも良い事例にもなるし、正直苦しい台所事情もありますので、大学活性化経費にも出すことになりました。残念ながら、評価が低く、申請は通りませんでした。このFDで、私たちの活動事例をお話できる機会をいただいたのは有り難いと考えています。

それから、基盤的な能力としての日本語教育です。最初、ネットや本屋で日本語教育のテキストを探してみましたが、留学生用の日本語の練習帳はたくさんあるのに、大学生向けてというのがなかなかないというか、見つかりませんでした。そのときに、山田先生が編集されていた「岐阜大学生のための日本語表現ノート」が目にとまりました。これは新入生全員に配られていましたので、これをぜひ活用しようということになったわけです。そこで、山田先生にお願いし、ワーキンググループの仲間に入らせていただきました。

もう1つ、学生をみていて、レポートの作成だけでなく、講義メモがとれない。講義の内容を全部A I M Sに載せてくれと言ってくる。やはり講義メモをつくらせることは重要じゃないかと。このメモを使って、課題について文章を書かせる、こういったことを通して、能動的な学習法を習得させようということになりました。

もう1つは、先ほどご説明した教員・留学生・大学院生の講演を通して、身近な研究の話、あるいは海外の話聞かせるということにしました。

#### 【スライド15】

それでは、今回の試みで、一番特徴と思う話をします。日本語教育です。

山田先生がこのような冊子「岐阜大学生のための日本語表現ノート」を編集されていて、センターあるいは機構より新入生全員に配られていました。これは自学自習用ということになっており、積極的にこのテキストを使って何か特別な教育をしていないと伺いました。そこで、全部で15章ありますので、3章ずつを自学自習させ、各授業でチェックし、5回の授業で終わらすというプログラムにしました。3章の演習問題を宿題として課して、それを実際やってきたかどうかをT A・S Aがチェックするといったような流れです。最後はそれに対する試験を行います。

#### 【スライド16】 【スライド17】

次に、この日本語教育の目的である運用能力に係わる能動的学習をどうするかということになります。これは、文章を書かせる、それから実際にレポートを作成させる、講義メモをつくって、そこから文章を書かせるという形を考えました。課題をそれぞれで出して

いって、課題をチェックするという形です。このチェックの際に、先ほどの宿題もそうですが、T A・S Aを活用します。そのために1班3人、24人というたくさんのT A・S Aが必要となります。

まず、文章の作成についてです。ある人の1日の行動記録をつくっておき、この行動記録から、課題1として、2つの文章を作成させました。まず、サスペンスのようですが、この人が犯罪に巻き込まれたと想定し、「アリバイを証明する文書を作成しなさい」という課題を与えました。それから、1日の行動記録を懇親旅行の下見の記録とし、旅行の企画書をつくりなさいという形で文章をつくらせました。

【スライド18】

レポートの作成ですが、科学的なデータを提示して、そこから図をつくらせてレポートを作成するという形としました。科学的レポートのポイントを説明し、レポートとはこういうふうを書くのだということを説明したあと、実際のレポートを作成させました。

【スライド19】

最後に講義メモです。8クラスで同じ講義というわけにはいかないなので、DVDを視聴してメモをとらせることとしました。NHKには、ティーチャーズ・ライブラリーという制度がありまして、ここからDVDを借用することとしました。ちょうど小保方さんの事件があり、コピペというのが一つ話題でありましたので、クローズアップ現代から「コピペ～「ネットの知」とどう向き合うか～」を視聴させることとしました。ただ、ティーチャーズ・ライブラリーは1枚しか貸せないということが分かり、8クラスで対応はできないという問題がでてきました。交渉した結果、3枚まで貸してもらえることになりましたので、2クラスずつ視聴させることができるようになりました。全部で30分弱ありますので、前半後半の2回に分けてそれぞれ聞かせて講義メモをとるというような形としました。

【スライド20】

これが日本語教育プログラムの全体像です。

最初にガイダンスをし、「日本語表現ノート」の宿題を出し、第2回目でチェックします。そして次のセクションを指定して宿題を出す。それから課題を出していく。次の週にこの課題をチェックする。これはT A・S Aが行います。そしてまた宿題・課題を出すということを5回繰り返し、最後はテストを行います。途中の課題の提出状況と、テストから成績評価を行いました。

【スライド21】 【スライド22】

最後に、教員と留学生と大学院生の講演です。教員と留学生の講演は、1年全員を対象に1クラスで行いました。課程・学科の教員には、各1コマを使って魅力的な研究紹介をしていただく。それから留学生に関しましては、母国の紹介、どうして日本に留学したのか、何を学びたいのか、文化の違いはどうか、いろんなことを自由に話していただく形にしました。数として勝る中国の留学生が多くなるのかと思いましたが、そうではなく

て、ロシアとスペインとウクライナという、少し日本人になじみの薄い国の3人の留学生の方たちが選ばれてきました。そういう意味ではおもしろいお話を聞くことができました。これは日本語でも英語でも良いとお願いをしましたが、結構日本語でお話をしてくれました。

次に大学院生ですが、先ほど言いましたように、大学院生というのは一番身近で勉強をし、さらに大学院で学ぼうということですから、意欲的な人が多いと考えることができます。どんなことを学んだのか、何が高校と違うのか、彼らの後悔も含めてここでお話をしてもらい、大学院へはどうして進学したか、研究の楽しさも織り交ぜて語ってくれました。実はこの後アンケートを見ますと、1年生のうちから、少しですが大学院進学への意欲が上がったような結果も出ています。これは各課程・学科の状況が違うため、各課程・学科で3クラスに分かれてお話をしてもらっています。30分程度がやはり適当な長さだろうということで、1コマ3名にお願いしました。

#### 【スライド24】

全15回のスケジュールです。最初のガイダンスでは、キャンパスガイドを各クラスで説明します。その後、全学的な講演が3回入ります。それから図書館ツアーが1回、研究紹介というのが大学院も含めて全部で5回、そして日本語教育5回という形で、全部で15回組んだわけです。

#### 【スライド25】

最初のガイダンスですが、応用生物科学部の学生は約200名おります。それを単純に8で割りますので、大体25名ぐらいが1クラスで、これはもう完全に機械的に振り分け、課程・学科がばらばらに入っています。そして、教員は、応用生命3名、生産環境3名、獣医2名、誰がどのクラスを担当してもいいというようにしました。それから、補助者として、8クラス、各3名ずつのTA・SAを入れ、24名のTAが必要になります。

#### 【スライド26】

実際の実施計画がその表になりますが、図書館ツアーでは、2クラス50名が限度ということですので。このように、図書館ツアーと日本語教育の1から5までと組み合わせながら、進めていきました。その間に全学的な講演が入り、どうしても2回分断されてしまいます。その後、大学院生、留学生の講演があつて、先生からの講演があつて全15回となります。

#### 【スライド27】

では、その結果がどうだったかです。受講生、TA、教員にアンケート調査を実施しましたので、ご紹介いたします。まず受講した学生の総合評価です。大体7割ぐらいが「大変良い」「良い」という評価を得ています。一方で、TAと教員からは比較的厳しい意見をいただきました。「大変良い」という意見はほとんどなく、半数ぐらいが「良い」、2割程度が「悪い」といった意見でした。先生の中には、「非常に悪い」を選択され、大学では画一的な教育はやるべきではないと自由記載欄に書かれる先生がいました。専門の授業との違いを、もう少しきちんと説明すべきだったと反省をしております。

【スライド28】

では、もう少し詳しくみていきます。これは学生の授業評価の結果です。まず、先生とかTAの対応に対する評価が非常に高いことが分かります。これは、少人数で個をみた教育がうまくいき、一定の評価を得たのではないかと考えています。これに対して、日本語の教育というのは、残念ながら低い評価でした。「大変良い」「良い」を合わせて、5割ぐらいです。「悪い」という評価も1割程度出てきて、ここは次回に向けて改善策を考えなくてはなりません。その中であって、「科学的レポート」が少し高かったり、あるいは「DVDの視聴、メモのとり方」といったところは「大変良い」というのが少し高かったりすることから、ここに改善策のヒントがあるかなということになりました。科学的レポート、講義メモというのが、次回改善策のキーワードと考えています。

それからTA・留学生・教員の講演は7～8割ぐらいが「大変良い」「良い」という選択をしてくれました。TAの講演に対しては、1/3ぐらいの学生が「大変良い」を選んでいますので、身近な先輩からの話には、それなりの説得力や効果があったのではないかと考えています。

【スライド29】

続いて、TAへの調査の結果です。「負担が過多ではなかったか」と聞きますと、半数程度が過多ではなかったと回答するものの、1割程度のTAは負担であったと回答していました。1クラス3名では負担を感じる学生もいたことになります。

それから、興味深いのが、この回答です。「今後、受講生の学習に役に立つか」との質問には、7割ぐらいが役に立つのではないかと返ってきました。では、「あなたはこういった授業を受けたかったか」と聞くと、受けたいは4割にとどまり、2割は受けたくないと言うのです。これはどうしてか考えると、彼らは、この授業に魅力を感じなかったのではないかと思います。やはり魅力ある授業をどうつくるのかというのは大事だと思いました。

【スライド30】

それから、担当教員の調査結果です。9割の教員が「班の人数は適切だった」「TAの数は適切だった」、全員が「負担は過多ではなかった」と回答しています。これは、誰でも担当できるということを意味し、このような方式で継続的に実施できる見通しが立ったと言えます。ですから、やり方そのものはそんなに悪くはないけど、内容に問題があるということかと思えます。

【スライド31】

評価の結果をまとめます。7割程度の受講生が好印象だったこと、教員・TAの対応は良かったのではないかと。それから、日本語の授業については賛否両論、学生からの自由記載欄を見ますと、「日本語を復習できて良かった」「初めてそういうことを知った」という学生もいますし、「こんなことは既に知っていた」という学生も結構いて、要するに能力の差がある中で同じ内容を課したことに間違いがあったのではないかと考えます。また、



レポートというのが比較的高い評価でしたので、今回はレポートを一つ切り口にすべきだなということになります。このように、日本語教育については改善の必要があるのは明らかです。それから、講演に関しては一定の評価を得ました。日本語教育に対して、強い抵抗感がある教員がいたということから、きちんと説明した上で、目的をしっかりと理解していただく必要があると思いました。

TAの評価からは、魅力がないということが分かりましたので、どう魅力をつくるかが課題として残りました。それから、教員が無理なく担当できるということも、継続性の観点からは貴重な結果です。TAには少し負担感があったようですので、増員を考える必要があると思います。以上を踏まえ、次回に向けて改善策を考え始めました。

#### 【スライド32】

次年度の実施計画です。目標は変えず、特徴としても国際化までは、同様に実施する計画です。日本語教育の部分を改善する必要性から、基盤的能力について再度検討し、まずはレポートを切り口にするにとしました。具体的に言いますと、レポートの作成法、この中に日本語の教育を織り込むことにしました。それから講義メモについても、必要ということになりました。

#### 【スライド33】

どうも、日本語教育というタイトルにも、一部の学生には「今さら感」があり、抵抗があったようです。そこで、議論した結果、「ノートテイキング・レポート作成の方法」を次年度のタイトルとし、またサブタイトルとして「大学の授業を受けるにあたり」ということにしました。今度は同じように8クラス、教員各1名、それからTA・SAを1名増員して各4名にしました。ただし、予算に限りがありますので、TA・SAを5回雇うのではなく、4回に減らして4名にして、実質そんなに経費が増えないようにしています。

#### 【スライド34】

今回、議論に加わっていただいた山田先生には、レポートの作成法をテーマに、「岐阜大学生のための日本語表現ノート」の改訂版をテキストとして作成していただいております。同時に練習問題も作っていただき、これを課題の1回目にします。次に、例えば環境に関するレポートを書けとか、そういうテーマに関するレポートというのを第2回課題にします。それから、3回目には、小試験を入れ込みながら、実験的な科学的なデータを出してレポートを作成するという課題3を課していきます。これらの課題について、TA・SAが個々にチェックし、指導していきます。

4回目には講義のメモのとり方ということで、相応しい講義ビデオを探しました。実はこの1年間、NHKの番組「視点・論点」を録画しておきました。これは、それぞれの専門家が講義形式で話をする10分の番組です。その中から、科学的内容のものを一つここで視聴させてメモをとらせて、メモのとり方を教えることとしました。課題4は、このメモを基にした文章の作成です。

最終回には、同様に科学的そして倫理的な内容のビデオを2本視聴させます。今年度

の「コピペ」の問題に続き、ここに倫理教育も入れ込んでいます。この2本についてメモをとらせて、メモ持ち込み可として、ビデオの内容に関する試験をすることとしました。

ここに、個人戦から何とか組織・集団戦に持っていくという目標の形が見え始めています。

【スライド35】

一連を通して、他部局にもかかわらず、教育学部・山田敏弘先生には、大変お世話をいただき、ご指導いただき、言葉に言い表せないくらい深く感謝しております。

土田先生には最初から、ずっと本件にかかわっていただきました。また、歴代の教学委員長、次期の教学委員長にお知恵をいただきながら進めてきました。さらに、多くの担当の先生方からご協力をいただきながら、何とか形になってきました。ここに、関係の皆様へ深く感謝申し上げたいと思います。

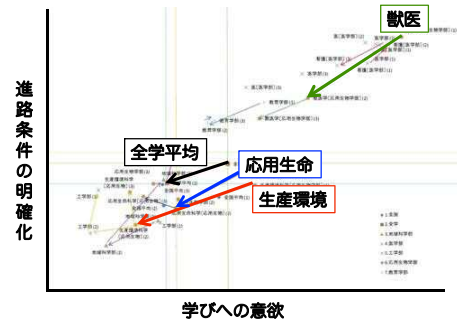
以上でお話を終わりにします。御清聴、ありがとうございました。

初年次セミナー改革の試み  
～ 応用生物科学部の取り組み～

岐阜大学・応用生物科学部  
副学部長 (企画・評価)  
杉山 誠  
(H28.2.3)

なぜ、初年次教育の改革？

大学基礎力調査 (ベネッセ) (1～2年生、H23～24年)



なぜ、初年次教育の改革？

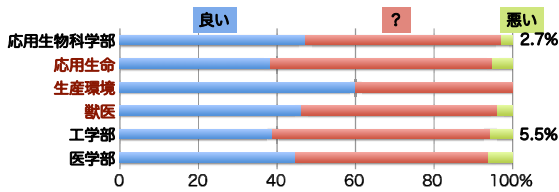
大学基礎力調査 (ベネッセ) (1年生、H23年)

Q. 入学理由

A. 学びたい学問分野がある

→Yes 応用生物科学部 91.6% (応生90.2、生環92.5、獣医92.9)  
(教育59.4、地域41.5、医学63.9、看護67.5、工学56.8)

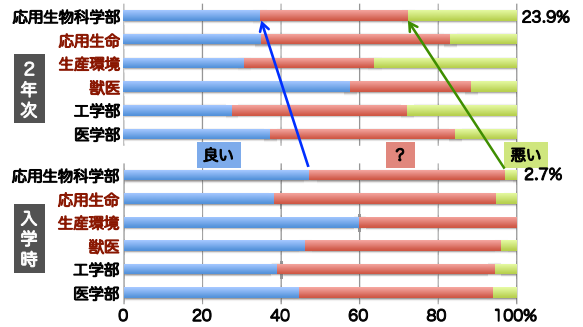
Q. 入学時イメージ？



なぜ、初年次教育の改革？

大学基礎力調査 (ベネッセ) (2年生、H24年)

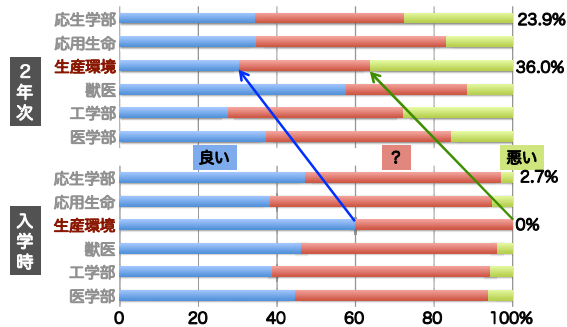
Q. イメージ？



なぜ、初年次教育の改革？

大学基礎力調査 (ベネッセ) (2年生、H24年)

Q. イメージ？



なぜ、初年次教育の改革？

大学基礎力調査 (ベネッセ) (2年生、H24年)

Q. イメージが悪くなった理由？

1. 興味のある科目が少ない 44.2% (生環 50.0%)  
vs 専門科目が少ない 0%

全学共通教育、教養教育、導入教育？

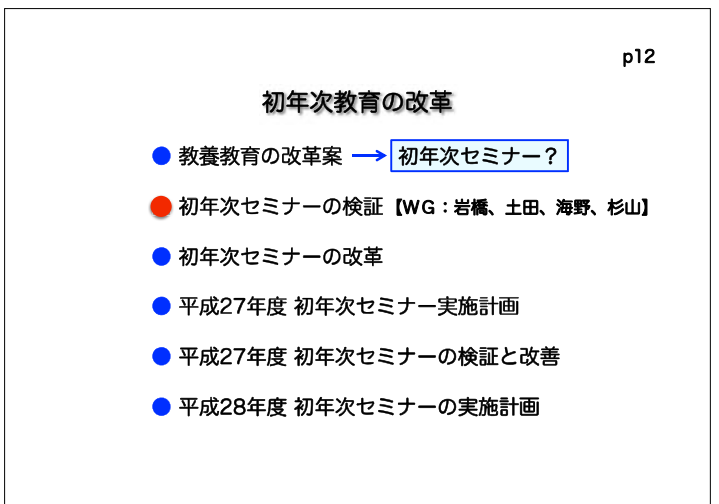
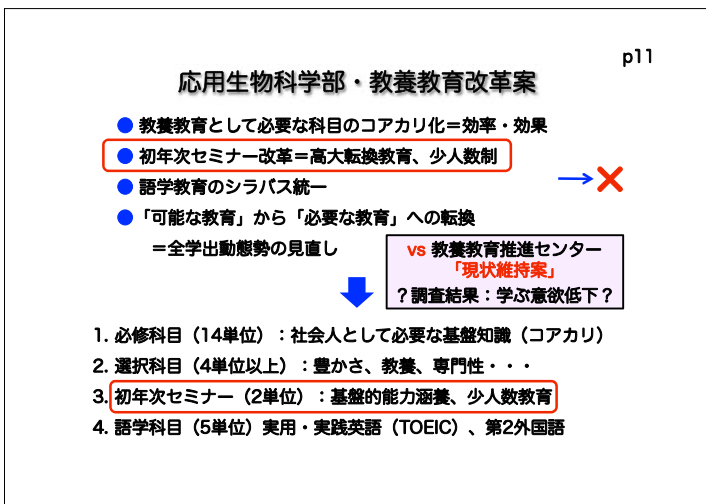
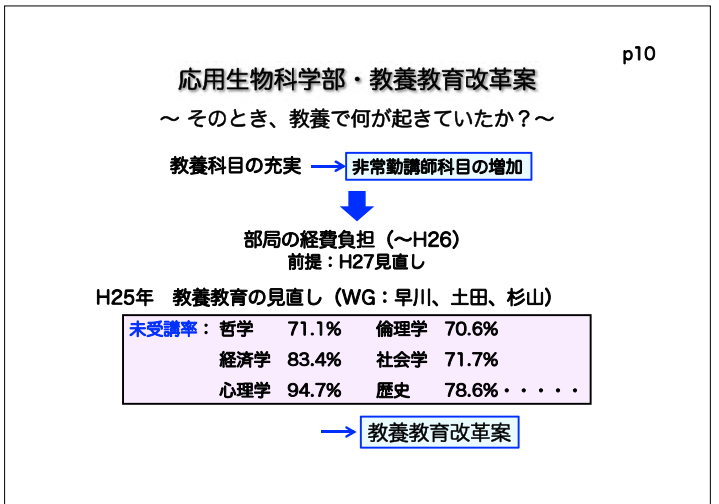
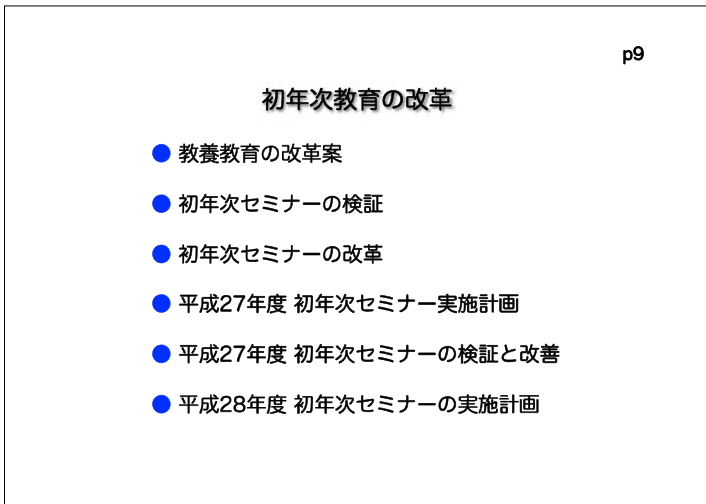
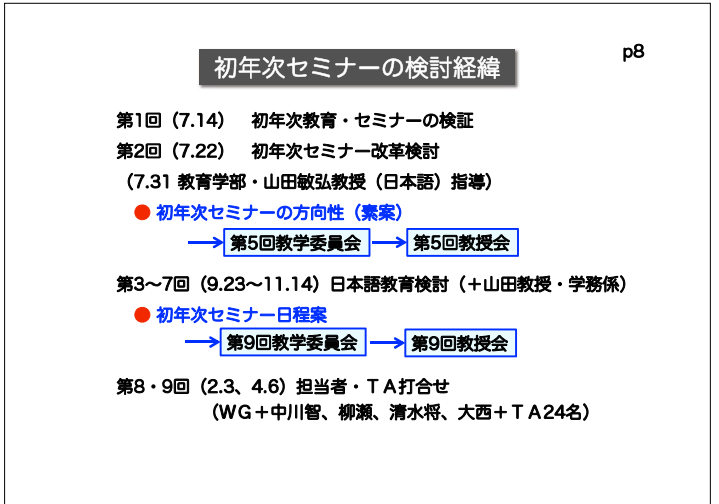
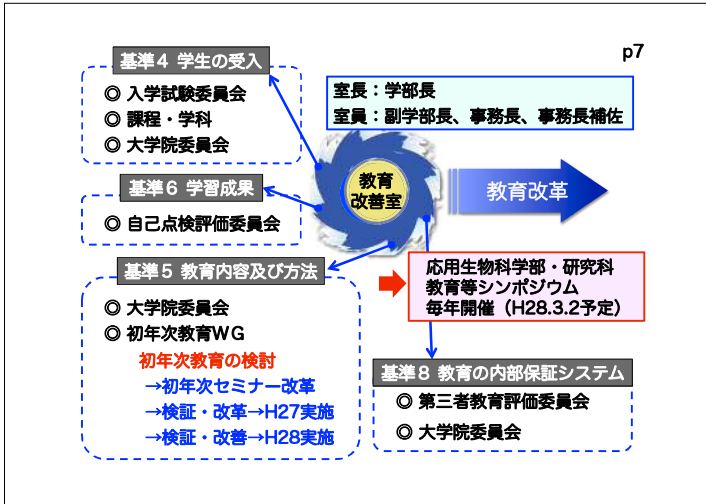
教育改善室

H25年 教養教育の見直し (WG: 早川、土田、杉山)

→ 教養教育改革案 vs 教養教育推進センター → X

H26年 初年次教育の検討 (WG: 岩橋、土田、海野、杉山)

歴代の  
教学委員長  
+  
副学部長



初年次セミナーの検証

p13

教養基礎科目 (学部開講)

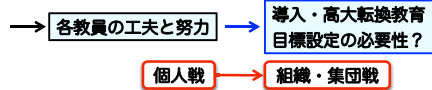
1年次 前期 2単位 (月曜5限)

8クラスに分かれて開講 (25名程度/クラス)

内容: 担当教員の裁量=様々な目標

【例】幅広い視点、専門分野の視点、課題探求、自学自習、視野の拡大、人間と動物の共生、基盤的能力涵養、プレゼン能力、国際感覚、生物学的視野、岐阜県、コミュニケーション・・・・・・・・

授業評価: 3.02~4.89 (H22~25)



初年次セミナーの改革

p14

教育目標: 導入、高大転換、能動的学習、基盤的能力涵養、国際化

特徴: 高大転換・能動的学習→少人数教育 (個に対応)

基盤的能力涵養→日本語教育

大学導入→研究の面白さ=大学院在籍者の活用、教員の研究

国際化→留学生の活用

- 方策
1. 少人数教育、大学院生・留学生の活用  
= TA、SAの活用 (経費の予算化)
  2. 日本語教育: 基盤的能力  
「岐阜大学生のための日本語表現練習ノート」  
教育学部・山田敏弘教授著
  3. 日本語教育: 能動的学習 (レポート作成、作文、メモ作成)
  4. 教員・留学生・大学院生の講演

初年次セミナーの改革

p15

2. 日本語教育: 基盤的能力  
「岐阜大学生のための日本語表現練習ノート」  
教育学部・山田敏弘教授著

旧教養教育推進センター刊  
(→教育推進・学生支援機構)  
無料配布 (自学自習用) (H27)

- ・ §1~§15: 5回授業
- ・ 3セクション: 自学自習
- ・ 演習問題 (宿題)
- ・ チェック (教員、TA・SA)
- ・ 最終回: 試験



初年次セミナーの改革

p16

教育目標: 導入、高大転換、能動的学習、基盤的能力涵養、国際化

特徴: 高大転換・能動的学習→少人数教育 (個に対応)

基盤的能力涵養→日本語教育

大学導入→研究の面白さ=大学院在籍者の活用、教員の研究

国際化→留学生の活用

- 方策
1. 少人数教育、大学院生・留学生の活用  
= TA、SAの活用 (経費の予算化)
  2. 日本語教育: 基盤的能力  
「岐阜大学生のための日本語表現練習ノート」  
教育学部・山田敏弘教授著
  3. 日本語教育: 能動的学習 (レポート作成、作文、メモ作成)
  4. 教員・留学生・大学院生の講演

初年次セミナーの改革

p17

3. 日本語教育: 能動的学習 (レポート作成、作文、メモ作成)

- 文章作成 (1回)
- ・ レポート作成 (1回) → 課題 → 次回チェック (TA・SA)
- ・ 講義メモ→作文 (2回)

行動記録 (1日)

- 課題1: 文章化 (アリバイ説明)
- 課題2: 懇親旅行の企画書 (目的、行程記入済み)  
概要、特色、費用、その他 (注意する点など)

初年次セミナーの改革

p18

3. 日本語教育: 能動的学習 (レポート作成、作文、メモ作成)

- 文章作成 (1回)
- ・ レポート作成 (1回) → 課題 → 次回チェック (TA・SA)
- ・ 講義メモ→作文 (2回)

科学的データ

- 課題3: 作図
- 課題4: レポート作成
  - ・ レポート作成のポイント説明
  - ・ はじめに、材料と方法、結果、考察

初年次セミナーの改革

p19

3. 日本語教育：能動的学習（レポート作成、作文、メモ作成）

- ・文章作成（1回）
- レポート作成（1回） → 課題 → 次回チェック (TA・SA)
- ・講義メモ→作文（2回）

DVD視聴→メモ→文章化（課題5、6）

NHKティーチャーズ・ライブラリー



初年次セミナーの改革

p20

3. 日本語教育：能動的学習（レポート作成、作文、メモ作成）

- ・文章作成（1回）
- ・レポート作成（1回） → 課題 → 次回チェック (TA・SA)
- ・講義メモ→作文（2回）

ガイダンス：自学自習指示（§1～3）+宿題1

- 第1回：宿題1チェック、自学自習（§4～6）+宿題2、課題1・2
  - 第2回：宿題2&課題1・2チェック、自学自習（§7～9）+宿題3、課題3・4
  - 第3回：宿題3&課題3・4チェック、自学自習（§10～12）+宿題4、課題5
  - 第4回：宿題4&課題5チェック、自学自習（§13～15）+宿題5、課題6
  - 第5回：宿題5&課題6チェック、試験
- 成績評価：宿題・課題（9×5点=45点）+テスト55点（§1～15）

初年次セミナーの改革

p21

教育目標：導入、高大転換、能動的学習、基盤的能力涵養、国際化

特徴：高大転換・能動的学習→少人数教育（個に対応）

基盤的能力涵養→日本語教育

大学導入→研究の面白さ=大学院在籍者の活用、教員の研究

国際化→留学生の活用

- 方策
1. 少人数教育、大学院生・留学生の活用  
=TA、SAの活用（経費の予算化）
  2. 日本語教育：基盤的能力  
「岐阜大学生のための日本語表現練習ノート」  
教育学部・山田敏弘教授著
  3. 日本語教育：能動的学習（レポート作成、作文、メモ作成）
  4. 教員・留学生・大学院生の講演

初年次セミナーの改革

p22

4. 教員・留学生・大学院生の講演

- 教員：魅力的な研究紹介（1クラス）  
各課程・学科1回ずつ担当
- 留学生：母国の紹介、日本留学の動機、日本で学びたいこと、文化の違い、日本の良いところ・・・（1クラス）  
日本語 or 英語  
3名（各課程・学科）各30分
- 大学院生：大学で学んだこと、大学と高校の学びの違い、大学院進学理由・・・（3クラス、各課程・学科）  
3名/クラス、各30分

初年次セミナーの改革

p23

教育目標：導入、高大転換、能動的学習、基盤的能力涵養、国際化

特徴：高大転換・能動的学習→少人数教育（個に対応）

基盤的能力涵養→日本語教育

大学導入→研究の面白さ=大学院在籍者の活用、教員の研究

国際化→留学生の活用

- 方策
1. 少人数教育、大学院生・留学生の活用  
=TA、SAの活用（経費の予算化）
  2. 日本語教育：基盤的能力  
「岐阜大学生のための日本語表現練習ノート」  
教育学部・山田敏弘教授著
  3. 日本語教育：能動的学習（レポート作成、作文、メモ作成）
  4. 教員・留学生・大学院生の講演

初年次セミナーの改革

p24

スケジュールの概略

1. ガイダンス（8クラス、教員8名）：キャンパスガイド説明等
- 2～4. 講演（保管管理センター、危機管理）（1クラス）
5. 図書館ツアー
- 6～8. 研究紹介（1クラス、課程・学科教員）
9. 大学院生講演（3クラス、課程・学科単位、各3名演者）
10. 留学生講演（1クラス、3名演者）
- 11～15. 日本語教育（8クラス、教員1名+TA・SA3名/クラス）

初年次セミナーの改革

p25

スケジュールの概略

1. ガイダンス (8クラス、教員8名) : キャンパスガイド説明等

学生：約200名  
 クラス編成：応生・生環・獣医混成、8クラス  
 機械的に振り分け (A~H、約25名/クラス)  
 教員：応用生命3名、生産環境3名、獣医2名 (毎年交代)  
 TA・SA：日本語教育の補助者 (8×3名=24名)  
 担当：ガイダンス、日本語教育 (6コマ)

11~15. 日本語教育 (8クラス、教員1名+TA・SA3名/クラス)

平成27年度 初年次セミナー実施計画

p26

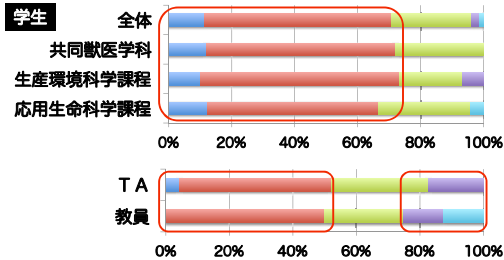
回		A	B	C	D	E	F	G	H
1	4.13	ガイダンス (キャンパスガイド2013、各クラスごとに実施)							
2	4.20	講演：学生支援とところの悩み (保健管理センター)							
3	4.27	図書館	日1	日1	日1	日1	日1	日1	日1
4	5.7	日1	日1	日2	日2	日2	日2	日2	日2
5	5.11	日2	日2	図書館	日3	日3	日3	日3	日3
6	5.18	日3	日3	日3	日3	図書館	日4	日4	日4
7	5.25	日4	日4	日4	日4	日4	日4	図書館	日4
8	6.1	講演：大学生に期待すること~巨大災害に備えて~							
9	6.8	日5	日5	日5	日5	日5	日5	日5	日5
10	6.15	TA講演 (応生)		TA講演 (生環)			TA講演 (獣医)		
11	6.22	講演：大学生のメンタルヘルス (保健管理センター)							
12	6.29	留学生TA講演							
13	7.6	応生教員講演							
14	7.13	生環教員講演							
15	7.27	獣医教員講演							

平成27年度 初年次セミナーの検証と改善

p27

授業評価アンケート結果

【総合評価】 大変良い 良い 普通 悪い 非常に悪い

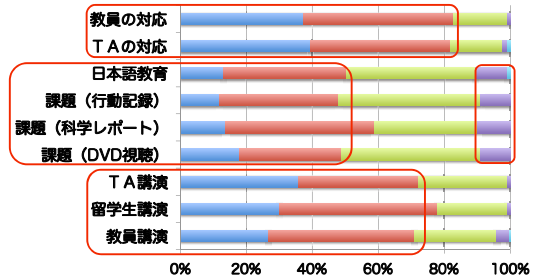


平成27年度 初年次セミナーの検証と改善

p28

授業評価アンケート結果

【学生】 大変良い 良い 普通 悪い 非常に悪い

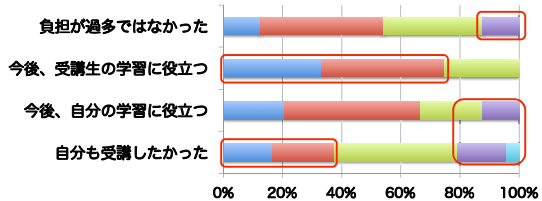


平成27年度 初年次セミナーの検証と改善

p29

授業評価アンケート結果

【TA】 強く思う そう思う どちらでもない 思わない 全く思わない

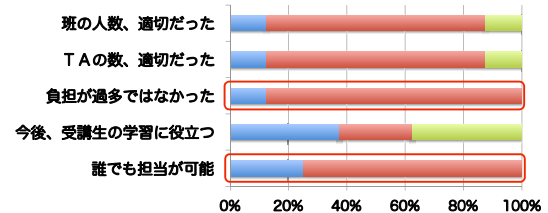


平成27年度 初年次セミナーの検証と改善

p30

授業評価アンケート結果

【担当教員】 強く思う そう思う どちらでもない 思わない 全く思わない



## 平成27年度 初年次セミナーの検証と改善

p31

### 授業評価アンケート結果（まとめ）

- ◎ 7割程度の受講生が好印象
- ◎ 教員・TAの対応に、大きな問題はない
- ◎ 日本語の授業については、賛否両論（学生）  
・レポート作成に関しては比較的高評価→レポート作成を切り口？
- ◎ 日本語教育については改善の必要
- ◎ 講演（TA・留学生・教員）に関しては一定の評価
- ◎ 強い抵抗感を示す教員存在
- ◎ TAの評価：今後の役に立つ vs 自分は受けたくない→魅力ない？
- ◎ 教員が無理なく担当できる授業
- ◎ TAには少し負担感→増員必要？

## H28・初年次セミナーの実施計画

p32

教育目標：導入、高大転換、能動的学習、基盤的能力涵養、国際化

特徴：高大転換・能動的学習→少人数教育（個に対応）

大学導入→研究の面白さ=大学院在籍者の活用、教員の研究

国際化→留学生の活用

基盤的能力涵養→レポート作成、講義メモ作成・活用

- 方策
1. 少人数教育、大学院生・留学生の活用=TA、SAの活用
  2. 教員・留学生・大学院生の講演
  3. 基盤的能力：レポートの作成法（+日本語教育）
  4. 大学の講義：能動的学習（講義メモ作成・活用）

## H28・初年次セミナーの実施計画

p33

### スケジュールの概略

1. ガイダンス(8クラス、教員8名)：キャンパスガイド説明等
- 2~4. 講演(保管管理センター、危機管理) (1クラス)
5. 図書館ツアー
- 6~8. 研究紹介 (1クラス、課程・学科教員)
9. 大学院生講演 (3クラス、課程・学科単位、各3名演者)
10. 留学生講演 (1クラス、3名演者)

11~15. ノートテイキング・レポート作成の方法  
~大学の授業を受けるにあたり~  
(8クラス、教員1名+TA・SA4名/クラス)

## H28・初年次セミナーの実施計画

p34

### ノートテイキング・レポート作成の方法

- 第1回 レポートの作成法(副読本)→課題1(副読本の練習問題)
- 第2回 テーマに関するレポート作成→課題2  
課題1のチェック(TA・SA)
- 第3回 副読本・レポート作成に関する小試験→評価  
実験レポート作成→課題3  
課題2のチェック(TA・SA)
- 第4回 講義メモの取り方：10分ビデオ①(科学的内容)視聴  
ビデオ①に関する課題4(メモ利用)  
課題3のチェック(TA・SA)
- 第5回 講義メモの取り方：10分ビデオ②(科学)、③(倫理)視聴  
ビデオ②③に関する試験(メモ利用)→評価  
課題4回収→評価

## 謝 辞

p35

日本語教育について、親身にご指導いただいた

本学・教育学部(国語教育)山田敏弘教授

に深く感謝いたします

教養教育検討WG・初年次教育検討WG

早川先生、土田先生、岩橋先生、海野先生、荒井先生

に御礼申し上げます



## 部門長挨拶

加藤 直樹 学修支援部門長



皆さま、お疲れさまでございました。

今日は、このようなアクティブラーニング教室を利用して、少しフランクな形態でのグループワークを取り入れてFDを実施させていただきました。従来のFDは講演会形式での伝達研修のイメージなのですが、グループワークでの対話を取り入れて意味をつくる効果を期待しました。教育の手法や技法というテクニカルな部分だけではなく、何が本当に初年次の中で必要なのだろうというような意味を参加者のみなさんと共有できるような場をつくりたいということでグループワークを取り入れた企画をしてもらいました。

学修支援部門での初年次セミナーに関する改善課題は、実施方法一つをとっても学部等の考えには違いがあり、1時間分を全学の共通内容として増やすだけでも変更が難しい面があり、悩みどころでもあります。ただ、その中でも今回のように初年次セミナーはどういう意味を持っているのかということは共有しなければいけない話です。その意味を共有できるとき、全学的な共通の体制中でも、学部それぞれの中でも改善は進められると思っています。

今日は初年次セミナーに関する調査結果とともに、応用生物科学部の改善取組を紹介させていただきました。以前から応用生物科学部が組織的に改善に取り組んでいらっしゃることはお聞きしていただきましたので、ぜひこの機会にご紹介いただければお願いしました。これは、岐阜大学における各学部は、それぞれの努力で改善を進めていらっしゃるの、いいものはいっぱいお持ちだと思っています。そして、そこから生まれた改善事例をどうやって我々が共有して、自分たちの学部教育の実践へ取り入れるかというようなところが必要なのではないかと思います。こうした事例を通して教育改善の意味を共有し一緒に考えたいというのが願いでした。

ところで、この機構の発足のときに、学生代表が挨拶をしてくれましたが学生が語ってくれた言葉で忘れられないことがあります。それは、岐阜大学のキャンパスには全5学部が集まっているのに学部を超えた学生の交流が余りないのだということです。そして、学生が交流できるのは本当に限られたサークル等の場なのですが、授業も含めたところでもっと多くの交流の場をつくり、対話の中でどうやって考えを深めるか、その機会をどうやってつくっていくのかを、学修支援部門の2年間の取り組みの柱にしてきました。

その視点から初年次教育の担当部門でも幾つか議論はしていただきました。今日は初年次セミナーを話題にしましたが、もう1つ「学びをデザインする」という科目を本年度の後期から開講しています。まだ受講者は限られているのですが、学生自身が課題を設定して、教員を探してお願いに行き、助言をもらいながら学習計画を組み立てていこうという教員も学生も学部間を超えた科目になります。

このような科目を開講する背景には、私たちは学生の力をもっと信じてあげないといけないのだという考えもあります。学生が無能だと思えば、指示をして与えることに私たちは専念します。逆に、有能だと思えば引き出せばいいので、そのチャンスをどうやってつくるのかというところに腐心をしていくことになります。

そういう点では、学生が学生をサポートする機会をつくることにも意味があります。昨年6月にオープンした図書館の1階のアカデミック・コアにはスチューデント・アシスタントのSAがいます。SAは今、自主企画のプログラムに取り組み、学生が学生に教えようというような講座を開いたりし、自主ゼミのようなものが生まれてきたりしています。彼らを、彼女らを私たちはもっと育ててあげられる場所をつくっていいのかなと思っております。

また、基礎的なアカデミックスキルについても、それだけを取り出して指導しても詰め込まれるようでは効果が低くなります。これも与えるより、学生自身がやっぱり求めるようになるというなあと考えています。そこで、アカデミック・コアで、希望者が選択して学び来てくれるような企画をすすめ、短期的なものを、例えば課題やレポート提出が多くなる時期に開催する試みで、自主的な学生を育てる場をどうやってつくっていくのかというようなことに取り組んでいます。

私たちは、今日話題にした初年次セミナーだけではなくて、このキャンパスで自主的に学ぶ学生を育てるための環境をどうつくっていくのかを考えていかなければなりません。今日は、その一環での1年目の初年次セミナーをどういうふうにするかという議論であったのかなあと思います。

この取り組みを、先ほどもお話ししましたが、本当にいい取り組みがほかにも多分、探せばそれぞれの学部にもあると思いますので、こうしたものを共有しながら、FDの機会を通して改善の一步、二歩を進められればと思います。今日は初年教育を改善するという心に火がついたかどうかというところで、まだくすぶっているかもしれませんが、ぜひ大きくなるように燃やしていきたいと思います。

今日はお疲れさまでした。ありがとうございました。

## 参加者データ

職種別内訳（人）	
教育系職員	33
事務系職員	3
役員	2
その他	0
合計	38

所属別内訳（人）	
役員	2
大学本部	8
教育学部	2
地域科学部	5
医学部	7
工学部	5
応用生物科学部	7
センター	2
その他	0
合計	38

# アンケート用紙掲載

## アンケート集計結果

◎回答者数

15名

### 1. 本研究会の満足度はいかがでしたか。

とてもよかった	よかった	あまりよくなかった	よくなかった
6	9	0	0
40%	60%	0%	0%

### 2. 「初年次セミナーのアンケート調査から見てきたこと」に関し、感想等をお書きください。

- ・ 話題はよくわかった。
- ・ 他学部の状況がわかった。
- ・ 「学修の高大転換教育科目であるべきである」はある程度は納得できるが、「接続」という視点も必要ではないかと思う。
- ・ 高大転換の必要性として「読む・書く・話す」「能動的な学び」を設定しているので、それらを達成できるような科目を検討すべき。
- ・ 授業計画案10項目の見直しと全学的な合意があると良いと思います。
- ・ 内容の分析が今後の課題となると思われました。アウトカムとして何を観るかが難しいと思われています。
- ・ 英語や文献調査の仕方、岐阜に絡んだ内容の不足には自分も納得がいく。重要度調査の結果にもあるように、周りの先生も行っていないため安心してしまっている。学生の評価結果も参考にして、次年度の内容・進行等について検討したい。
- ・ 「学生の満足度の高い内容」と「是非、学生に提供したい内容」とは必ずしも同じではない。
- ・ 学部別にさまざま、ちょっと難しい所がある。教養部時代の教養セミナーの意義（学部を超えて学生が交流できる）も伝えておきたかったことです。すぐには成果があがるものでもない、もっとゆるやかで且つ継続するような方法も考えたいです。
- ・ 教員、各学部・学科の学生が、どのように「初年次セミナー」を捉えているのかが、よくわかりました。また、問題点・改善点が明らかになり、今後のあり方について考えることができたと思います。
- ・ 学部縦割りの初年次セミナーの中に如何に共通の基本的事項を盛り込むか、また、盛り込めるかの問題であると思いました。

3. 初年次セミナーについて、どのようなねらいを持って講義されていますか？また、そのねらいを達成するために特に工夫しておられることがあれば、お書きください。

- ・担当していない。
- ・読む・書く・調べる。
- ・意識改革。
- ・講義していません。
- ・このFDに適して設問??
- ・自ら課題を見出して、それを解決するためのアプローチの方法・内容を調べて、最終的なまとめや結論を出す点。その過程において、他者と討議して批判し合い失敗・うまくいかないことも多く体験してもらおう。
- ・大学生活における人間力の養成（これは、生涯における人間力向上につながるべき）
- ・教養部時代は担当していました。1年生は新鮮でおもしろかったです。毎年、テストやテーマを変えながら楽しんでいました。
- ・大学での学修を上手く始められるための機会として考えています。

4. グループ討議で得られた、今後役立ちそうな知見がありましたら、お書きください。

- ・20分ではまとめきれない。
- ・機構のリーダーシップが必要。
- ・学生相互の支援体制づくりで初年次セミナーを補完する。
- ・大学では、社会に出て必要な能力を高めるべきという意見が参考になった。（社会では正解がない世界を生きていくことや失敗から学ぶこともあるなど）
- ・学部の上級生・大学院生などを講師とする。学生間の能力差を実感させない授業の内容・方法・タイトルの工夫。
- ・小中～高校～大学のつながり（切断）、学部間の連携など、もう少しテーマを絞ってワールドカフェでもしてみたいです。
- ・院生のTAとしての活用。しかし、現実的に難しい。（TAの訓練が必要なため）

5. 「初年次セミナー改革の試みー応用生物科学部の取り組みー」に関し、感想等をお書きください。

- ・改革の必要性・経緯・目的・実施計画・評価・改革案が完璧にまとめられたいい内容であった。
- ・大変参考になりました。
- ・すばらしかった。失敗部分も含めて全てが貴重なデータですね。

- ・非常に素晴らしい取り組みだと思いました。今後もこのような各学部の取り組みを紹介する機会が必要だと思います。
- ・一例とせずに全学への拡張などを検討すべき。
- ・良い具体例でした。
- ・専門の教員を雇用すべき。教養部を復活させるべき。T Aに意見を出してもらうのも参考になるかも。
- ・進め方として見習うべきことが多い。
- ・参考になりました。
- ・学部の課題を詳細に分析し何が起きているのか、どう対処していくかを学部一丸となって取り組んでいる。全ての課題に取り組むのではなく、取り組めそうな所から取り組むということの重要性を再認識した。明確な目的・目標・設定・評価の視点の工夫も重要。
- ・地域科学部の「地域研究入門」では、学生とのQ & A、教員同士のパネルトーク、ワークショップなど、できるだけやり取りしながら理解を広げ深めていく方法をやっています。
- ・教育改善室を設けて、実際の改革プロセスを知ることができ、興味深かったです。また、T A・S Aの活用やレポートの作成・ノートテイキング等、有益な情報だったと思います。
- ・素晴らしい取り組みであると思いました。

**編 集**

**2016年3月**

**教育推進・学生支援機構  
学修支援部門（初年次教育担当）**